

# 普天間フィールー丘陵古墓群

—平成22年度 キャンプ瑞慶覧内米海軍病院移設予定地区発掘調査報告書—

2011年(平成23年)3月  
沖縄県 宜野湾市教育委員会

## 序

本報告書は、キャンプ瑞慶覧内に所在する周知の遺跡である普天間フィールー丘陵古墓群一帯において、海軍病院移設に伴う開発行為に先立ち、平成20・21年度に宜野湾市教育委員会が実施した詳細分布調査並びに埋蔵文化財緊急発掘調査の成果をまとめたものであります。

普天間地域は、琉球八社の一つである普天満宮の創建の地として知られ、戦前まで中頭郡の交通・政治・経済の中核地として栄えておりましたが、戦後その大部分がキャンプ瑞慶覧として接収され、現在戦前まで所在していた旧集落の面影を辿ることはできません。しかし、本古墓群が所在する普天間フィールーと称される丘陵についてはこれまで大きな改変がなされず、今日に至るまで丘陵斜面部に古墓が良好な状態で残されております。

今回の調査により、本古墓群南側の詳細な分布状況や各古墓の型式等を把握することができたことにより、本古墓群が普天間旧集落の歴史を物語る上で貴重な資料であると言えます。

今回の調査成果が、広く市民の歴史的教材ないしは文化財の保護・活用資料として活かされ、歴史学等の学術資料として御検討いただければ幸いに存じます。

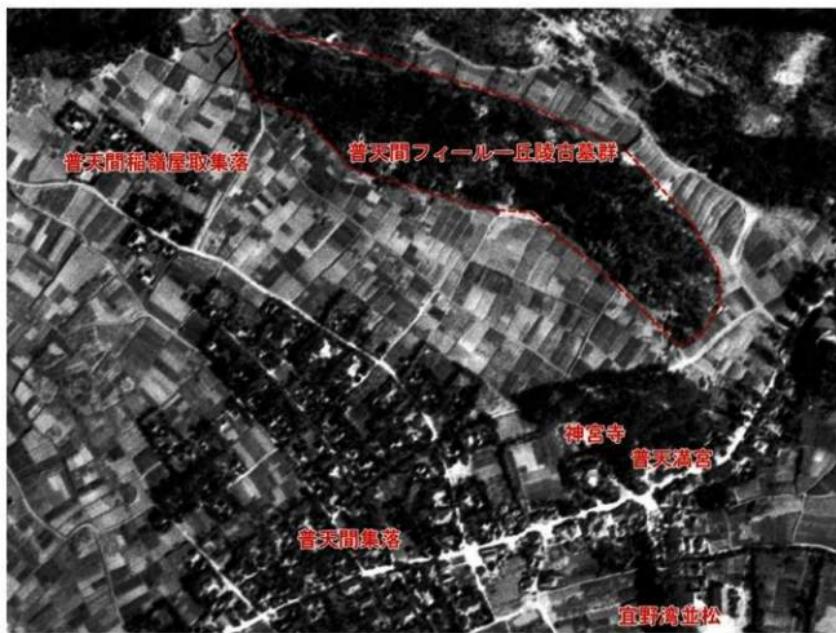
末尾になりましたが、多大な御指導を賜りました文化庁文化財部と沖縄県教育庁文化課、並びに貴重な御指導・御助言を賜りました市文化財保護審議会の先生方と宇普天間郷友会、その他関係各位に対しまして心から感謝申し上げます。

2011（平成23年）3月

沖縄県 宜野湾市教育委員会  
教育長 宮城茂雄



卷頭図版1 普天間フィールー丘陵古墓群全景(平成10年作成オルゾに加筆)



卷頭図版2 普天間フィールー丘陵古墓群全景(昭和20年米軍撮影写真に加筆)



卷頭図版3 2号墓全景（南西より）



卷頭図版4 11・12号墓全景（南より）



卷頭図版 5 2号石積墓全景（南より）



卷頭図版 6 4号墓全景（南より）

## 例　言

1. 本報告書は、米軍基地キャンプ瑞慶覧地区内の海軍病院移設に伴う開発行為に先立ち、宜野湾市教育委員会が沖縄防衛局との受託事業として、平成20~21年度にかけて実施した普天間フィールー丘陵古墓群の詳細分布調査と埋蔵文化財緊急発掘調査の成果を収録したものである。
2. 発掘調査並びに本文中における遺跡の基準方位は、国土座標系（旧座標系）第XV座標系の座標北を用い、層位・遺構は海拔高（那覇）を基準とした高さである。
3. 本書に掲載した地図は、基本的に宜野湾市都市計画課発行の都市計画図（1:2,500）を使用しているほか、調査範囲については、平成20年度に株式会社沖縄中央エンジニアリングに委託して作成した地形測量図1:500を使用しており、調査区周辺および当古墓群については、一部加筆修正している。その他の情報図については、宜野湾市教育委員会が管理・運営しているGISデータを使用している。
4. 本書で使用した層名は、農林水産省水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』に準じた。
5. 本書の執筆は森田直哉・玉城夕貴・横尾昌樹・宮城淳一があたり、執筆分担は下記一欄に記している。尚、本書の編集は森田直哉・横尾昌樹・宮城淳一が行った。

第I章・第1節・第2節、第II章・第1節・・・・・・・・・・・・森田直哉  
第II章・第2節 ・・・・・・・・・・・・玉城夕貴  
第I章・第3節、第III章・第2節1・第3節、  
第IV章・第1節・第2節1・2、第3節、第V章 ・・・・・・・・横尾昌樹  
第III章・第1節・第2節3・4・第3節、  
第IV章・第2節1・第3節 ・・・・・・・・宮城淳一

現地で得られた遺物及び実測図・写真・画像デジタルデータ・地形測量等の各種調査記録類はすべて宜野湾市教育委員会文化課に保管している。

凡例：	① 墓口	⑧ ポージ
	② 石碑	⑨ 三昧台
	③ 門冠い	⑩ 童の手
	④ 鏑石	⑪ 袖回り
	⑤ 眉	⑫ 袖石
	⑥ 曰	⑬ 庭植み
	⑦ 子臼	⑭ 庭匂い
		⑮ ヌンチャ



宜野湾市史編集委員会編 1985 『宜野湾市史』第5巻 資料編4 参考

## 目 次

序

巻頭図版

例言

第Ⅰ章 調査に至る経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	1
第3節 調査経緯	3
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	4
第1節 遺跡の立地と地理的環境	4
第2節 歴史的環境	5
第Ⅲ章 普天間フィールー丘陵古墓群詳細分布調査と成果	8
第1節 古墓群の概要	8
第2節 詳細分布調査成果概要	9
1. 普天間フィールー丘陵古墓群データベース	9
2. 墓室内の造りと規模	12
3. 亀甲墓の形態的特徴	14
4. 掘込墓の特徴	16
5. 石積墓	20
第3節 まとめ	23
第Ⅳ章 普天間フィールー丘陵古墓群発掘調査と成果	24
第1節 発掘調査の概要	24
第2節 発掘調査の成果	25
1. 遺構	25
2. 遺物	33
第3節 まとめ	39
第Ⅴ章 結語	40
参考文献	41
報告書抄録	

## 卷頭図版目次

- 卷頭図版1 普天間フィールー丘陵古墓群全景  
(平成10年作成オルソに加筆)
- 卷頭図版2 普天間フィールー丘陵古墓群全景  
(昭和20年米軍撮影写真に加筆)
- 卷頭図版3 2号墓全景 (南西より)
- 卷頭図版4 11・12号墓全景 (南より)
- 卷頭図版5 2号石積墓全景 (南より)
- 卷頭図版6 4号墓全景 (南より)

## 挿図目次

第1図 宜野湾市の位置と普天間の位置	4	第7図 3号墓実測図	30
第2図 普天間の聖地	6	第8図 4号墓実測図	32
第3図 普天間地域周辺の遺跡分布図	7	第9図 藏骨器	33
第4図 調査範囲地形測量図 (平成21年作成)	10	第10図 沖縄產施釉陶器	35
第5図 1号墓実測図	26	第11図 沖縄產無釉陶器	37
第6図 2号墓実測図	28	第12図 本土產磁器	38

## 図版目次

図版 1 作業風景	3	図版 11 2号石積墓外観	21
図版 2 普天間フィールー丘陵遠景 南西より (平成20年度調査時)	8	図版 12 3号石積墓外観	22
図版 3 調査範囲 (絆線部)	10	図版 13 4号石積墓外観	22
図版 4 墓室内の天井の造り (写真左: 6号墓、写真右: 2号墓)	12	図版 14 発掘作業風景	24
図版 5 11号墓写真	16	図版 15 1号墓写真	25
図版 6 12号墓写真	17	図版 16 2号墓写真	27
図版 7 13号墓写真	18	図版 17 3号墓写真	29
図版 8 15号墓写真	19	図版 18 4号墓写真	31
図版 9 1~4号石積墓遠景 南西より (奥から順に1・2・3・4号石積墓)	20	図版 19 藏骨器	33
図版 10 1号石積墓外観	21	図版 20 沖縄產施釉陶器	36
		図版 21 沖縄產無釉陶器	37
		図版 22 本土產磁器	38

## 挿表目次

第1表 普天間フィールー丘陵古墓群周辺の遺跡	7	第8表 調査における亀甲墓の類型	15
第2表 墓型式表	10	第9表 宜野湾市内の亀甲墓の眉形態比 (呉屋ほか1989を参考に作成)	23
第3表 普天間フィールー丘陵古墓群データベース	11	第10表 出土遺物総点数表	33
第4表 石積墓データベース	11	第11表 藏骨器観察表	34
第5表 墓室内の規模と造り	13	第12表 沖縄產施釉陶器・無釉陶器観察表	34
第6表 眉とボージ・墓庭各部位の凡例	14	第13表 本土產磁器観察表	38
第7表 眉とボージ・墓庭における各部位の比率	14		

## 第Ⅰ章 調査に至る経緯

### 第1節 調査に至る経緯

普天間フィールー丘陵古墓群は、1981年に宜野湾市教育委員会が実施した文化財分布調査により確認され『土に埋もれた宜野湾』(1989年)にて報告がなされている「周知の遺跡」である。丘陵の尾根に沿って近世から近代とみなされる古墓群が確認され、普天間旧集落の草分けとされる東江家・志礼家の「神墓」及び「標石を持つ石積墓」等の古墓が所在する。また伝承では、新城旧集落の石原家に関する古墓が所在するとされている。そのため同古墓群に所在する古墓の変遷等を含め、詳細分布調査等が必要とされていたが、同古墓群は米軍基地であるキャンプ瑞慶覧地区に所在しており、確認以後立入調査等が実施されていない地城であった。

### 普天間フィールー丘陵古墓群の開発に伴う保護調整

普天間フィールー丘陵古墓群が所在するキャンプ瑞慶覧地区の普天間ハウジングエリアの地域にて海軍病院移設に伴う緊急発掘調査を実施している際、沖縄防衛局より平成20年11月7日付、沖防企第75号にて海軍病院移設に伴う開発行為が予定されている普天間グスクンニー丘陵北側斜面から普天間川流域沿い及び普天間フィールー丘陵の一部の区域における文化財の有無照会がなされた。それに伴い市教育委員会は、沖縄防衛局と当該区域に所在する文化財の今後の取り扱いについて協議し、地形測量及び詳細分布調査の実施について理解を得た。

### 詳細分布調査・緊急発掘調査の実施

平成21年2月より詳細分布調査の基礎資料とするために、当初計画に当該区域の地形測量を追加し地形測量図(S=1/500)を作成し、亀甲墓、掘込墓、破風墓等、型式が異なる古墓が確認された。その地形測量図に基づき、平成21年5月より当該区域にて詳細分布調査を実施した。その結果、新たに堀込墓等が確認された事により地形測量図の修正を行った。それにに基づき、市教育委員会は、沖縄防衛局へ平成21年9月15日付、宜教文第142号「キャンプ瑞慶覧における文化財の有無について(回答)」にて文化財保護法に基づく文化財の取り扱い及び埋蔵文化財調査の必要性を説明し、法定された所定の手続き等の実施について伝えた。その後、当該区域にて確認された古墓の内4基が開発行為の範囲に該当する事が判明し、沖縄防衛局と協議の結果、当初発掘調査計画範囲を変更し、古墓4基の緊急発掘調査を実施した。

### 第2節 調査体制

普天間フィールー丘陵古墓群の詳細分布調査は平成20年度、緊急発掘調査については平成21年度に実施し、資料整理及び報告書作成にかかる整理業務は、平成22年度に実施した。調査体制は下記のとおりである。

事業主体 沖縄県宜野湾市教育委員会

事業責任者 教育長 普天間朝光(平成20年度)

教育長職務代行者 新田和夫(平成20年度)

教育長 宮城茂雄(平成21~22年度)

事業総括	教育部 教育部長	伊佐 友孝 (平成 20~21 年度)
	〃 〃	宮平 良和 (平成 22 年度)
	〃 教育次長	新城 正一 (平成 20~21 年度)
	〃 〃	宮里 幸子 (平成 22 年度)
	文化課 課長	和田 敬悟 (平成 20~21 年度)
	〃 〃	呉屋 義勝 (平成 22 年度)
事業事務	〃 文化財保護係長	豊里 友哉 (平成 20~22 年度)
	〃 文化財保護係主任主事	仲村 健 (平成 20~21 年度)
	〃 〃 主事	城間 肇 (平成 20 年度)
	〃 〃 主事	森田 直哉 (平成 20~22 年度)
	〃 〃 主事	伊藤 圭 (平成 21~22 年度)
	〃 〃 主事補	下地 明子 (平成 20 年度)
調査業務	〃 文化財保護係主任主事	仲村 健 (平成 20~21 年度)
	〃 〃 主事	森田 直哉 (平成 20~22 年度)
	〃 〃 啓託職員	横尾 昌樹 (平成 20~22 年度)
	〃 〃 〃	宮城 淳一 (平成 20~22 年度)
資料整理業務	〃 文化財保護係主任	森田 直哉 (平成 22 年度)
	〃 〃 啓託職員	横尾 昌樹 (平成 22 年度)
	〃 〃 〃	宮城 淳一 (平成 22 年度)
	〃 〃 〃	西銘 五月 (平成 22 年度)
	〃 〃 臨時職員	比嘉ムツ子、奥間陽子、宮城和江、清水朝美 武島朋美、平川邦子、山城裕美
委託業務	発掘調査支援業務委託	株アーキジオ沖縄
	測量業務委託	株沖縄中央エンジニアリング

#### 調査指導及び調査協力（職名等は当時）

調査指導及び調査協力者として下記の方々に指導を仰いだ。

福宜田佳男	文化庁文化財部記念物課	主任文化財調査官
島袋 洋	沖縄県教育庁文化課	記念物班 班長
上地 博	〃	主任調査員
金城 龜信	沖縄県立埋蔵文化財センター	調査班 班長
知念 隆博	〃	主任
宮城 正秀	字普天間郷友会	会長
嵩元 政秀	宜野湾市文化財保護審議会	会長
宮城 邦治	沖縄国際大学 教授 (宜野湾市文化財保護審議会 副会長)	
赤嶺 政信	琉球大学 教授 ( 〃 ) 委員)	

### 第3節 調査経緯

#### 詳細分布調査の経過

普天間フィールド丘陵古墓群における詳細分布調査は、調査範囲内の環境整備を実施した後、地形測量を行い、平成21年5月11日より着手した。実質的な詳細分布調査については市文化課文化財保護担当職員が行った。調査は、調査範囲内に分布する古墓の位置および型式等の特徴を把握することを目的とした。調査内容は、地形測量により古墓の位置座標を確認した後、古墓の型式・造りを観察し各部位の簡易計測を行った。また、調査した古墓の各箇所の写真を撮影し、平成21年5月21日に調査を終了した。

#### 発掘調査の経過

当古墓群における発掘調査は、海軍病院移設に伴う開発行為の範囲に該当する古墓4基を対象として、平成21年9月23日より着手した。対象とした4基の位置座標や墓型式等については、詳細分布調査で確認しており、発掘調査では古墓の下部構造を確認することを目的とした。調査した墓型式は破風墓、亀甲墓、掘込墓の3型式で、それぞれ古墓の中心軸に沿って幅50cmのトレーナーを設定し掘削を行った。トレーナー内は琉球石灰岩盤まで掘削し、古墓の下部構造を確認した。今回、掘削において遺物はほとんど検出されず、採取した遺物は表探が大半であった。調査は各古墓の実測図作成の終了をもって、平成21年11月19日に完了した。



図版1 作業風景

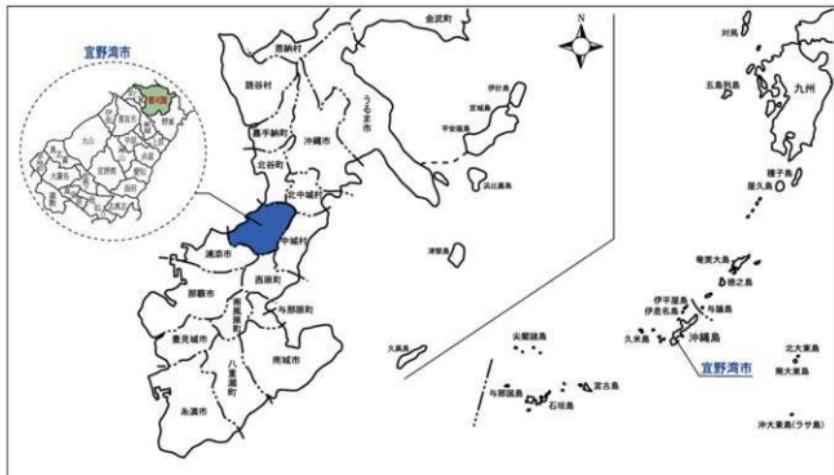
## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 第1節 遺跡の立地と地理的環境

普天間フィールー丘陵古墓群の所在する宜野湾市は、沖縄本島の中部西海岸にあり、東シナ海に面し、北谷町・北中城村・中城村・西原町・浦添市に隣接する。総面積は $19.37\text{ km}^2$ を測り、略東西 $6.1\text{ km}$ 、略南北 $5.2\text{ km}$ の略長方形を呈する。そのうち米軍用地は、本市における地目の $33.3\%$ （1992年現在）を占め、市域北西にキャンプ瑞慶覧、中央には普天間飛行場がそれぞれ占有している。これは、本市地目の $36.3\%$ にあたる民間の宅地に次ぐ広さである。

本市の地形は、起伏の小さい平坦面が多いことが特徴で、海岸から内陸に向かって雛壇状を呈する4つの海岸段丘からなる。第1面（低位段丘下位面）は、比屋良川の河口右岸から宇地泊・大山・伊佐に連なる標高3~30mの海岸低地である。第2面（低位段丘上位面）は、標高30~40mの石灰岩段丘で、大山・真志喜・宇地泊・伊佐の住宅地が密集する。第3面（中位段丘下位面）は、キャンプ瑞慶覧から普天間飛行場へと延びる標高50~90mの石灰岩段丘である。第4面（中位段丘上位面）は、標高90m以上の高位置にあり、赤道から宜野湾にかけて展開する緑地帯がその代表である。内陸側の3つの段丘面（第2面～第4面）は、大半が琉球石灰岩層で成り立つ。この琉球石灰岩層の段丘縁には洞穴と湧泉が点在し、本市の自然及び人文的景観の特徴となっている。河川は、浦添市・西原町との境に比屋良川、北谷町・北中城村・中城村との境に普天間川が流れる。

普天間は、中位段丘に位置し戦前までの旧集落は小字普天間原に所在していた。旧集落の後背地である小字後原に所在する普天間フィールー丘陵古墓群は、標高約90mの弓状を呈する石灰岩丘陵斜面に分布する古墓群で、その周辺には、普天満宮洞穴遺跡、普天間グスクンニー遺跡、普天間下原第二遺跡、普天間後原第二遺跡、普天間古集落遺跡、普天間稻嶺屋取古集落が所在している。



第1図 宜野湾市の位置と普天間の位置

## 第2節 歴史的環境

宜野湾市の北東部に位置する普天間は方言でフティマといい、琉球八社の一つである普天満宮の創建の地として知られ、戦前には普天間へと通じる郡道（宜野湾並松街道）は首里・那覇方面と中部方面を結ぶ交通の要所であった。普天満宮には多くの参拝者が訪れ、神宮寺前一帯に立ち並ぶ商店街は活況を呈し、中頭高等小学校や中頭郡役所、農事試験場などの官公庁も置かれ、戦前の普天間は中頭郡の政治・経済の中心地として栄えた。しかし、戦後は米軍によって戦前の集落は軍用地として接収されてしまい、その面影を辿ることはできない。

**近世期における普天間村と野嵩村** 普天間村と野嵩村は1671年の宜野湾間切新設の際に、中城間切から編入した村である。中城間切に属していた頃の普天間は、17世紀頃の『絵図郷村帳』と『琉球国高究帳』には“寺ふてま村”とあり、普天満宮と神宮寺を抱える村であることに由来するという（『南島風土記』）。一方、野嵩は『絵図郷村帳』に“前ふてんま”、『琉球国高究帳』に“前普天間”とされ、その村名は普天満宮と神宮寺の前方（南側）にあることに関わるという（『角川地名大辞典』）。宜野湾間切編入後には『琉球国由来記』（1713年）によると、寺ふてま村は“普天間村”、前普天間村は“野嵩村”とされる。このように、間切所轄の変更により、中城間切“寺ふてま村”と“前普天間村”は、宜野湾間切“普天間村”と“野嵩村”として組み込まれたのである。

**普天間の成立** 普天間村には志礼と東江の二つの根屋がある。伝承によると普天間村は、元来志礼（屋号）を根屋とする前普天間と東江（屋号）を根屋とする後普天間の二つに分かれており、いつしか前普天間（現普天間小学校辺り）が後普天間（普天間神宮寺の西隣）に移動したとされている。

かつて中城間切の一村であった“前普天間”（野嵩村）と伝承にみられる前普天間との関連は定かではないが、前普天間と後普天間は、古代に派生したとされるマキヨ村落の可能性を検討し得るものと思われる。

**『琉球国由来記』による年中祭祀** 『琉球国由来記』（1713年）には、普天間村の聖地として“美里森（神名マネヅカサコバヅカサノ御イベ）”と“宮城之殿”が取り上げられているが、その2か所の所在は不明である。とはいえ、『琉球国由来記』には、それらの聖地で執り行われる年中祭祀についても記載されていることから、普天間村のかつての祭祀の有り様に着目したい。

琉球王府時代、ノロと呼ばれる女性神役が村落祭祀の主司祭者として農耕儀礼を司っていた（比嘉1983）。宜野湾間切にも宜野湾ノロ、野嵩ノロ、謝名ノロの3名の女性神役がおり、それぞれの村々の祭祀を管轄していた。野嵩ノロの祭祀範域は野嵩・普天間・安仁屋・新城の4村である。

『琉球国由来記』に記載された普天間村の御嶽とされる「美里森（神名マネヅカサコバヅカサノ御イベ）」は、野嵩ノロの崇所として旧暦3・8月に祈願される御嶽とされている。一方、普天間村の殿とされる「宮城之殿」では、野嵩ノロが麦祓四祭を行う祭祀場とされ、普天間地頭が五水・芋神酒を供し、百姓中が籠・シロマシ・芋神酒を供するとされている。このように、祭祀場における供物提供者や供物についても記されており、年中祭祀へのノロの参与を捉えることができる。

**普天間旧集落の聖地** 字普天間は、普天間原・下原・後原・東原・前原・前筋原・石川原の7小字からなり、集村形態をなす普天間旧集落と下原付近に散村形態をなす小規模な稻嶺屋取旧集落を有する。

普天間旧集落は、集落東側に位置する普天満宮を背にして、その西側に集落が展開する。集落の拠点となる普天間原（小字）には、根屋とされる志礼と東江の旧家の他に、かんさぎ庭、島御殿、火の神屋敷、地頭火の神、村泉等の聖地を確認することができる。

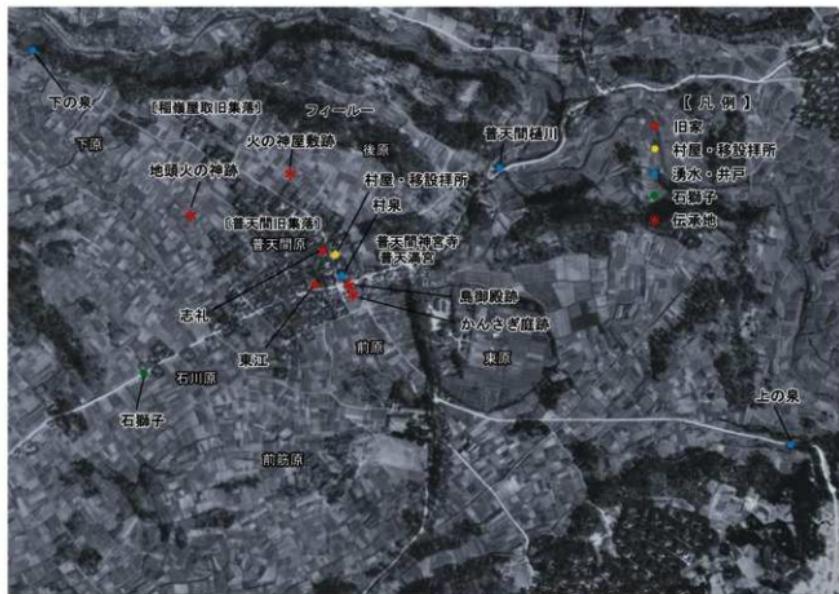
志礼と東江の両根屋の神墓は、集落後方の後原（小字）に位置するフィールーの麓にあるとされて

おり、志礼には、みるく神と獅子の神が祀られていたようだ。また、普天間では旧7月13・15日と旧8月15日に厄災払いに加え、集落の繁栄と五穀豊穰祈願を目的とした獅子舞の行事が行われており、戦前には獅子の神を保管する志礼で獅子舞が演じられた。

普天間原を取り囲むようにして、後原（小字）に普天間樋川、下原（小字）に下の泉、野嵩の安里畠原（小字）に上の泉などの湧泉もみられ、石川原（小字）の石川橋付近には石獅子が一基鎮座していた。<sup>アート2バタキ</sup>

普天間旧集落の西側にある下の泉と野嵩集落後方の崖下にある上の泉は、普天間旧集落の拝泉であり、清明祭の翌日に水ナディーの行事が行われた。下の泉を東江、上の泉を志礼が担当して行事を取り仕切り、両拝泉を一年ごとに交互に拝した。

本来、村に散在していたこれらの拝所は、戦前には村屋に合祀されていたようだが、沖縄戦および米軍による土地接収の頃にかけて消失してしまった。そこで、1955（昭和30）年に新築された普天間公民館の敷地内に祀られたのち、1969（昭和44）年に新たに設けられた普天間拝所に合祀された。その合祀祠には、神あさぎ庭・島御殿・火の神・みるく神・普天間樋川・村泉・下の泉・上の泉が祀られている。戦後の普天間拝所および普天間公民館の所在地は、米軍接収を逃れ、戦後の居住地として使用されていた東原（小字）に位置する。

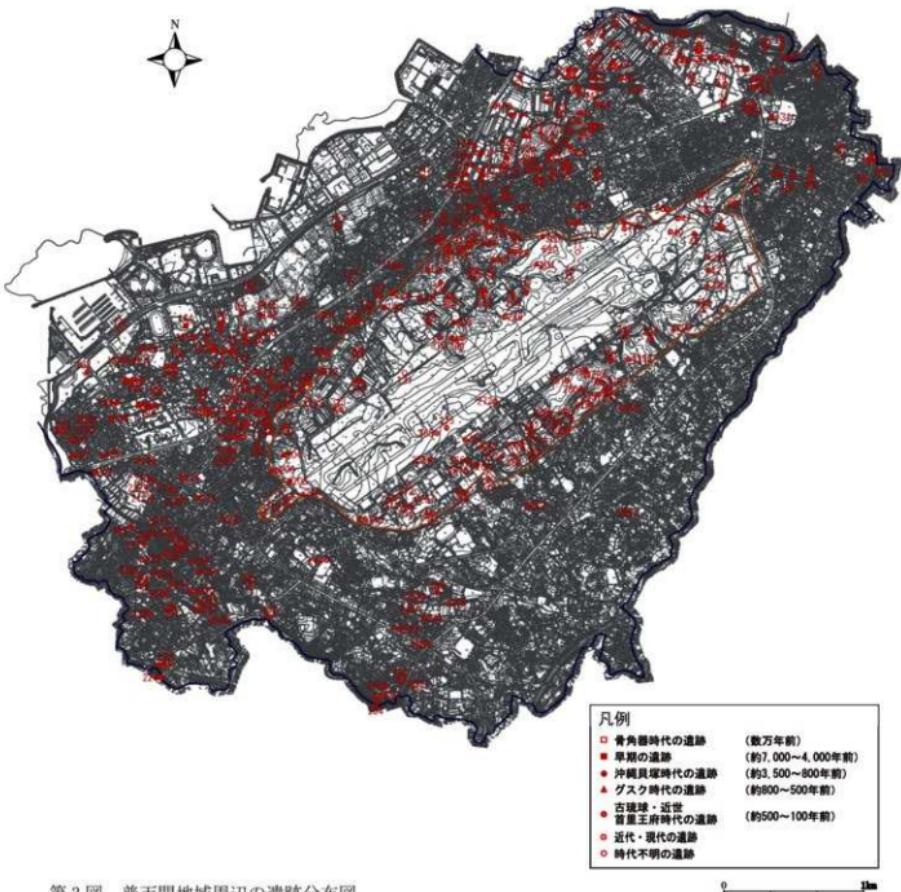


※本図は聞き取り調査によって確認された聖地の所在地を昭和15年頃の字普天間の地図に一部追加したものである  
(背景:昭和20年米軍撮影写真)

第2図 普天間の聖地

第1表 普天間フィールー丘陵古墓群周辺の遺跡

014	普天満宮洞穴遺跡	027	ピンジュルガマ祭祀遺跡
015	グスクニー遺跡	028	ジトゥーヒヌカン祭祀遺跡
016	石川原遺跡	029	東原古墓群
017	下原遺跡	030	カンジャースウィー古墓群
018	下原洞穴遺跡	031	フィールー丘陵古墓群
普天間	後原第一遺跡	032	普天満宮
	普天間古集落	033	神宮寺
	稲嶺屋取古集落	034	県立農業試験場跡
	シチャヌカー古湧泉	035	普天間橋
	ムラガー古湧泉	300	後原第二遺跡
	ヒージャーガー古湧泉	301	下原第二遺跡
	島御殿祭祀遺跡	302	グスクニー古墓群
	カンサギ祭祀遺跡		



第3図 普天間地域周辺の遺跡分布図

### 第Ⅲ章 普天間フィールー丘陵古墓群詳細分布調査と成果

#### 第1節 古墓群の概要

普天間フィールー丘陵古墓群は、宜野湾市の北東に位置し、琉球八社の一つである普天満宮の北西に広がる普天間フィールー丘陵に分布する古墓群である。当古墓群が所在する普天間フィールー丘陵は標高90.8mで、北西から南東にかけて弓状に延びる形をしている(巻頭図版1参照)。

当古墓群の古墓は丘陵の南側と北側の傾斜面に多く分布し、丘陵の中腹に築かれている。分布する古墓の型式も様々で、これまでの調査では近代以前に一般的であった掘込墓や明治時代以降に広がったとされる破風墓や亀甲墓が確認されている(呉屋ほか1989)。また、古墓の中には丘陵の南側に所在していた普天間旧集落の根屋(ニーヤ:集落の草分け筋)である東江家と志礼家の神墓(カミバカ)があり、普天間フィールー丘陵が普天間旧集落の墓域として利用されていたことが考えられる。丘陵は、戦後、キャンプ瑞慶覧地区の範囲内に含まれたため多くの古墓は墓口が開けられ、墓室内の藏骨器や遺骨は移動されたが、今回の調査のなかでは、これらの古墓以外に藏骨器や遺骨が移動されずに墓室内に残る古墓や、遺骨が取り出され藏骨器だけが墓付近に散在している古墓も見られた。当古墓群の北東側には普天間カンジャーヌウイー古墓群が位置する丘陵があり、分布する古墓の墓型式は普天間フィールー丘陵古墓群より一時期新しいことが確認されている(呉屋ほか1989)。

昭和20年の航空写真では、普天間フィールー丘陵とその周辺に所在する集落の様子が見て取れる(巻頭図版2参照)。戦後、基地建設のため集落は移動されたが、丘陵については現在の航空写真からはその範囲や様子の変化は窺えない(巻頭図版1参照)。のことから、現在も丘陵には古墓が良好な状態で残されていることが予想される。また、普天間旧集落の根屋の神墓があることから、当古墓群と集落との関わりを知るうえでも重要であるといえる。今回、海軍病院移設に伴う開発行為が及ぶと予定される丘陵の一部を調査範囲とし、古墓の現状とその性格を把握するため詳細分布調査を行った。



図版2 普天間フィールー丘陵遠景 南西より(平成20年度調査時)

## 第2節 詳細分布調査成果概要

当古墓群は、東西に延びる普天間フィールー丘陵の裾野に沿って古墓が造られている。今回の詳細分布調査は、海軍病院移設に伴う開発行為が予定されている範囲が丘陵の西側であるため、丘陵西側を調査範囲とした。現在、古墓周辺は草木が繁茂している状態にあり、さらに丘陵上位からの土砂の流れ込みや、缶やガラス・瓶などの廃棄物もあり、これらにより墓口が塞がれている古墓もあった。今回調査するにあたり、草木の伐採および廃棄物の処理を行い、詳細分布調査を実施した。

調査範囲内の古墓は、東西に雑壇状に延びる丘陵の下段にあり、丘陵中腹部を掘り込んで造られている。今回の調査では、掘込墓、亀甲墓、破風墓、「標石を持つ石積墓」を確認した。当古墓群では石灰岩礫を円形や方形に組み、集石の中央に立石を配する「標石を持つ石積墓」(以後、石積墓と表記する)の存在が3基報告されており(呉屋ほか 1989)、今回改めてこれらを確認した。さらに、これらの石積墓の西方に新たに石積墓を1基発見し、計4基の石積墓が丘陵に沿って丘陵下段に配置されている状況を確認した。また、亀甲墓や破風墓については、墓前面にある平場より1m程高い段上に造られる傾向がみられた。これらの古墓の袖石や壁等には主に石灰岩の切石を用い、墓の外形や壁面の整形には漆喰やモルタルが用いられていた。掘込墓については、調査において12号墓とした古墓はボージ墓と伝えられるものであり(呉屋ほか 1981・1989)、今回再確認した。墓室内に藏骨器を残す古墓は13号墓と16号墓で、その他の古墓では墓域内で藏骨器破片を散見するほどであった。13号墓・16号墓には墓室内に石厨子や甕形蔵骨器が数多く残され、藏骨器内には遺骨が納められたままの状態であった。これらの古墓のうち築造年代が推定できたのは亀甲墓の5号墓のみで、墓室内奥壁に墓誌があり、「大正九年一月落成」と書き記されていた。5号墓以外の古墓には墓誌なく、築造年代については確認できなかった。

今回の調査において、現地では古墓の規模や形態的特徴の観察と計測で終始し、墓の性格や築造年代の推定には至らなかったが、調査で得られた資料や情報を整理するにあたり亀甲墓の築造年代の推定、そして掘込墓の特異的形態が明らかになってきた。これらの成果を以下に述べていく。

### 1. 普天間フィールー丘陵古墓群データベース

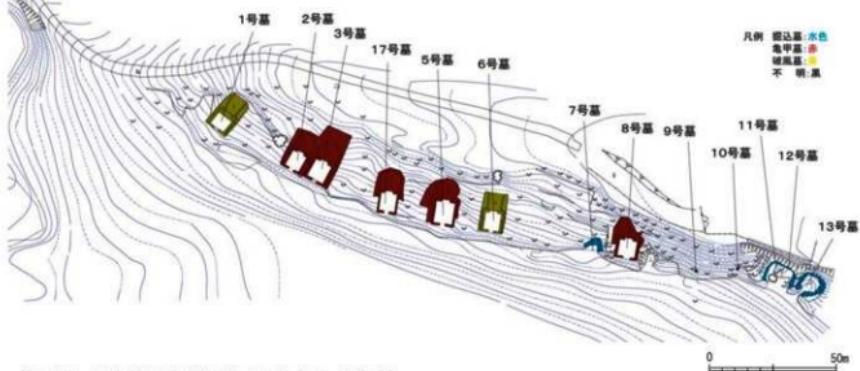
今回の詳細分布調査により古墓19基、石積墓4基を確認し、古墓の型式の内訳は、掘込墓9基、亀甲墓5基、破風墓2基、型式不明3基である。これら4型式の類型については第2表に示した。尚、石積墓については、現状において詳細が不明確であるため第2表には示さなかった。調査では各古墓の位置座標、型式、外観として屋根・墓庭・墓口・墓室内の造りと寸法を観察し計測を実施した。調査方法は、墓の各部位はコンベックスやエスロンテープを用いて計測し、外観・造りについては実見観察し所見を記した。各古墓の調査データは第3表にまとめた。第3表中のデータ項目は「位置」、「分類」、「外観」に大別した。「位置」については、位置座標として墓口のX・Y座標と、墓の向きとして墓の正面が向く方向を示した。ただし、座標値は小数点以下を四捨五入し繰り上げて表記している。「分類」については第2表を基に分類し、古墓の構造はないが丘陵に窪地ができるて、墓として使用されていたと想定できたものは不明として整理した。「外観」については屋根、墓庭、墓口の3箇所における形状及び構造の観察所見と、各箇所の寸法を示した。また、表中において、調査するにあたり土砂に埋もれてしまい墓室内に入ることができなかつた古墓や、調査が実施できなかつた古墓の分類項目については[−]記号で示している。尚、第3表に示した古墓のうち14～16号墓については、開発行為の影響が少ないと考えたため、確認踏査のみ行い地形測量は行わなかつた。今回再確認できた3基の石積墓については、既に1～3号石積墓の名称が付けられていたためこれに倣い、新たに確認できた1基を4号石積墓として整理し、これらの石積墓の調査データについては第4表にまとめた。

第2表 墓型式表

墓型式	特徴	代表例	模式図
掘込墓	傾斜や崖の基盤を掘り込んだ墓。墓の正面の装飾は無く、墓口は石灰岩や漆喰などで塞がれる。	宜野湾市 小禄墓 宜野湾市 奥間ノロ墓	
破風墓	掘込墓の正面を装飾し、墓の屋根が破風形になる墓。家形と外観は似ているが、岩盤を掘り込んで墓室とする点で異なる。	那霸市 玉陵	
亀甲墓	掘込墓の正面を装飾し、墓の屋根が亀甲型になる墓。掘り込んだ空間を墓室とするものと空間の天井も掘り込み、石積みで天井にアーチ状の石積みを施すもの（巻墓）がある。	那霸市 伊是名殿内の墓 宜野湾市 大山東方第V丘陵古墓群【上江家管掌の亀甲墓】	



図版3 調査範囲（斜線部）



第4図 調査範囲地形測量図（平成21年作成）

第3表 普天間フィールー古墓群データベース

墓番号	位置		分類	外観						備考	
	座標	方向		屋根		墓底		墓口			
				平面形・状況	寸法(m)	平面形	造り・状況	寸法(m)	面積(m <sup>2</sup> )	造り・状況	寸法(m)
1 X 27624 Y 32287	南西 破風墓	方形	縦軸 横軸	6.2 4.3	正方形	庭内を整地し、庭園いは石灰岩の布積みで構築。	幅 5.40 奥行 6.00	32.400	石灰岩の布積み。 奥行 80	幅 64 奥行 106	巻墓(マチバカ)。
2 X 27647 Y 32275	南南西 亀甲墓	梢円形	縦軸 横軸	6.1 6.7	正方形	庭内を整地し、庭園いは石灰岩の布積みで構築。	幅 5.15 奥行 5.50	28.325	石灰岩の布積み。 奥行 73	幅 63 高さ 100	
3 X 27655 Y 32271	南南西 亀甲墓	梢円形	縦軸 横軸	6.5 7.6	正方形	庭内を整地し、庭園いは石灰岩の布積みで構築。	幅 5.80 奥行 6.00	36.540	石灰岩の布積み。 奥行 90	幅 65 高さ 100	
4 X 27815 Y 32348	北西 圓込墓	岩盤を利用	縦軸 横軸	— —	縦長の方形	庭園いは左側、墓門は右側に残っており、前面積みで積まれている。	幅 3.00 奥行 3.70	11.100	岩盤を掘り込む。 奥行 190	幅 140 高さ 60	遺骨を検出する。
5 X 27695 Y 32256	南南西 亀甲墓	梢円形	縦軸 横軸	7.1 7.8	正方形	庭内を整地し、庭園いは石灰岩の布積みで構築。	幅 6.70 奥行 7.70	31.590	石灰岩の布積み。 奥行 68	幅 65 巻墓(マチバカ)。	
6 X 27711 Y 32255	南南西 破風墓	方形	縦軸 横軸	5.9 4.3	正方形	庭内を整地し、庭園いは石灰岩の布積みで構築。	幅 5.30 奥行 4.90	27.587	石灰岩の布積み。 奥行 73	幅 63 高さ 100	巻墓(マチバカ)。
7 X 27744 Y 32243	南南西 不明	岩盤を利用?	縦軸 横軸	— —	—	—	幅 — 奥行 —	—	—	幅 — 奥行 —	掘込墓の可能性あり。
8 X 27756 Y 32246	南南西 亀甲墓	梢円形	縦軸 横軸	7.8 8.5	正方形	庭内を整地し、庭園いは石灰岩の布積みで構築。	幅 5.75 奥行 5.30	30.935	石灰岩の布積みによって構築。 奥行 88	幅 62 巻墓(マチバカ)。	
9 X 27778 Y 32278	南南西 不明	不明	縦軸 横軸	— —	—	—	幅 — 奥行 —	—	—	幅 — 高さ 106	墓があったと考えられる埋地。
10 X 27792 Y 32236	南南西 不明	不明	縦軸 横軸	— —	—	—	幅 — 奥行 —	—	—	幅 — 高さ 81	墓があったと考えられる埋地。
11 X 27805 Y 32237	南南西 圓込墓	岩盤を利用	縦軸 横軸	— —	縦長の方形	墓底はNo.12と共有。庭園いは岩盤を掘り込んで構築。	幅 9.90 奥行 7.10	63.190	岩盤を掘り込む。 奥行 220	幅 110 高さ 111	
12 X 27809 Y 32235	南南西 圓込墓	岩盤を利用	縦軸 横軸	— —	横長の方形	墓底はNo.11と共有。庭園いは岩盤を掘り込んで構築。	幅 9.90 奥行 7.10	63.190	岩盤を掘り込む。 奥行 258	幅 120 高さ 81	
13 X 27818 Y 32233	南西 圓込墓	岩盤を利用	縦軸 横軸	— —	正方形	庭園いは岩盤を削って構築。	幅 5.50 奥行 7.10	39.050	岩盤を掘り込む。 奥行 87	幅 73 高さ 154	墓底内に鐵骨器が数多く残る。
14 X — Y —	南西 圓込墓	岩盤を利用	縦軸 横軸	— —	—	—	幅 — 奥行 —	—	岩盤を掘り込む。 奥行 90	幅 55 高さ 50	墓口が上砂で埋まっている。
15 X — Y —	南西 圓込墓	岩盤を利用	縦軸 横軸	— —	縦長の方形	庭園いは岩盤を掘り込む。墓門は相方積み。	幅 5.90 奥行 6.30	37.170	岩盤を掘り込む。 奥行 106	幅 265 高さ 365	
16 X — Y —	南西 圓込墓	岩盤を利用	縦軸 横軸	— —	—	—	幅 — 奥行 —	—	岩盤を掘り込む。 奥行 54	幅 170 高さ 119	墓底内に鐵骨器が数多く残る。
17 X 27677 Y 32261	南南西 亀甲墓	梢円形	縦軸 横軸	6.7 7.2	正方形	庭内を整地し、庭園いは石灰岩の布積みで構築。	幅 5.70 奥行 5.30	30.210	石灰岩の布積み。 奥行 77	幅 63 高さ 100	
18 X 27595 Y 32358	北西 圓込墓	岩盤を利用	縦軸 横軸	— —	—	—	幅 — 奥行 —	—	岩盤を掘り込む。 奥行 55	幅 116 高さ 34	
19 X 27614 Y 32348	北西 圓込墓	岩盤を利用	縦軸 横軸	— —	—	—	幅 — 奥行 —	—	岩盤を掘り込む。 奥行 60	幅 70 高さ 30	

第4表 石積墓データベース

墓番号	座標	平面形	石材	積み方	寸法(m)	立石	香炉	備考
1 X — Y —	—	方形	石灰岩	切石	布積み 長軸 1.90 短軸 1.90	無し	有り	丁寧に石が組まれている。
2 X 27817 Y 32221	半円形	石灰岩	切石・礫	布積み 長軸 2.00 短軸 1.75	有り	無し	中央に円形の石積みがある。	
3 X — Y —	—	方形	石灰岩	礫	雜積み 長軸 1.60 短軸 1.70	無し	無し	
4 X 27811 Y 32224	円形	石灰岩	切石・礫	布積み 長軸 1.10 短軸 1.07	無し	無し	ほぼ正円に近い形状。	

## 2. 墓室の造りと規模

確認した古墓のうち、墓口が埋没せず墓室内に入る事ができた古墓については、墓室の造りと規模について調査した。調査方法は、墓室の造りについては観察し所見を記し、墓室の規模については墓室の寸法（奥行き・幅・高さ）を計測した。これら調査したデータは第5表にまとめた。

墓室の構造は、破風墓・亀甲墓とともに奥が5段、左右に1段ずつ配する傾向が見られ、掘込墓は有段と無段があり、有段の場合は奥・左・右に1段ずつ配する。墓室の天井は、破風墓と亀甲墓において整形された石灰岩を丁寧にアーチ状に組む巻墓（マチバカ）と、石灰岩岩盤を掘りこんだままの状態で露呈させドーム状に形作るものがみられた。これらの天井や壁に用いられる石灰岩の目地にはモルタルが使用され、露呈した石灰岩岩盤の縫みにもモルタルを入れ込み整形している箇所を確認した。

今回、これらの各墓型式の墓室規模を示すにあたり、墓室の奥行き×幅を平面面積として求め、各墓型式を比較し、その結果を第5表に示した。また、あわせて墓室の高さも示した。平面面積については、破風墓と亀甲墓は型式内で差異が見られないが、掘込墓は13号墓や16号墓など極端に狭いものや、15号墓のように広い造りのものもあり、型式内ではらつきがみられた。第5表のデータから、各墓型式の墓室寸法【①平面面積（m<sup>2</sup>）、②墓室高さ（m）】の平均値（①各型式総 m<sup>2</sup> ÷ 総基数、②各型式総m ÷ 総基数）は、破風墓①9.36m<sup>2</sup>・②3.08m、亀甲墓①9.98m<sup>2</sup>・②2.26m、掘込墓①8.47m<sup>2</sup>・②1.64mであり、①については型式ごとの平均値に大きな差異はないが、②については破風墓がやや高く造られているといえる。また、各型式を個々で見ると破風墓・亀甲墓は個々に差異が見られないが、掘込墓においては13号墓や16号墓など極端に低いものや、15号墓にみるように天井が高く、広く空間を造るものもあり、型式内ではらつきがみられる。

墓庭については、破風墓と亀甲墓の造りは墓門及び庭園は石灰岩を布積みして築き、掘込墓は墓室を構築するのと同様、石灰岩岩盤を掘り下げて築いている。墓庭の規模について、幅×奥行きを平面面積として各古墓について求め、その結果については第3表に示した。幅と奥行きについて、破風墓と亀甲墓はともにおよそ5~6mであるが、そのうち亀甲墓である5号墓はおよそ6~7mとやや大きく造られていた。掘込墓については墓室の規模と同様、各古墓ではらつきがみられる。また、後述するが、墓庭を共有する11・12号墓や、庭園いや墓門を有する4・15号墓があり、墓庭の造りにおいても各古墓で差異がみられた。これらの墓庭面積の平均値は破風墓299.93m<sup>2</sup>、亀甲墓355.2m<sup>2</sup>、掘込墓427.4m<sup>2</sup>あり、型式ごとの平均値に差異がみられる。掘込墓については、個々の墓に大きな差異があり、11・12号墓では他の型式を含め1.5倍近くの広さがある。



アーチ状（巻墓）



ドーム状

図版4 墓室の天井の造り（写真左：6号墓、写真右：2号墓）

第5表 墓室の規模と造り

墓番号	型式	平面面積 (m <sup>2</sup> ) ①	墓室高さ (m) ②	天井の 形状	墓室の造り	棚		備考
						奥	右	
1号墓	破風墓	9.78	2.50	アーチ状	墓室内入口・壁は不均一な方形の石灰岩切石を布積みし、天井は均一な長方形の石灰岩切石をアーチ状に組む。目地はモルタルで接合。	5	1	1
2号墓	亀甲墓	9.39	2.31	アーチ状	岩盤を掘り込んで造る。墓室内入口・左壁は不均一な方形の石灰岩切石を相方積みし、モルタルで接合する。右壁・奥壁は岩盤を利用し、縫みにモルタルを埋め込む。	5	1	1
3号墓	亀甲墓	10.64	2.14	ドーム状	岩盤を掘り込んで造り、壁は岩盤を利用し、縫みにモルタルを埋め込む。墓室内入口のみ不均一な方形の石灰岩切石を相方積みし、モルタルで接合する。	5	1	1 藏骨器破片が僅かに残る。
4号墓	掘込墓	2.72	0.81	ドーム状	墓室は岩盤を掘り込み、整形して利用する。墓室内は狭く造られている。	0	0	0
5号墓	亀甲墓	10.39	2.25	アーチ状	墓室内入口・壁は方形の石灰岩切石を布積みし、天井は均一な長方形の石灰岩切石をアーチ状に組む。目地はモルタルで接合。	5	1	1 墓誌あり。大正9年落成。
6号墓	破風墓	8.94	3.65	アーチ状	墓室内入口・壁・奥壁は方形の石灰岩切石を布積みし、天井は均一な方形の石灰岩切石をアーチ状に組む。目地はモルタルで接合。	5	1	1 藏骨器破片が僅かに残る。
8号墓	亀甲墓	9.28	2.70	アーチ状	墓室内入口・奥壁は不均一な石灰岩を相方積みし、側壁は方形の石灰岩切石を布積みする。天井は均一な長方形の石灰岩切石をアーチ状に組む。目地はモルタルで接合。	5	1	1
11号墓	掘込墓	12.21	1.12	ドーム状	岩盤を掘り込んで造る。葬道は掘り込んだままの状態。墓室内奥・左・右に岩盤を掘り込んで棚を設ける。右棚は不均一な石灰岩切石を正面積みし縁石とする。	1	1	1
12号墓	掘込墓	11.45	2.09	ドーム状	岩盤を掘り込んで造る。葬道は方形の石灰岩で補強する。墓室内奥・左・右に岩盤を掘り込んで棚を設ける。棚は不均一な方形の石灰岩切石を相方積みし縁石とする。	1	1	1 ボージ墓。
13号墓	掘込墓	3.10	0.81	ドーム状	岩盤を掘り込んで造る。葬道は方形の石灰岩で補強する。墓室内奥・左・右に岩盤を掘り込んで棚を設ける。棚は不均一な方形の石灰岩切石を相方積みし縁石とする。	1	1	1 石扇子・マンガン掛け藏骨器等が散乱する。
15号墓	掘込墓	15.17	3.65	ドーム状	岩盤を掘り込んで造る。葬道および墓室内は岩盤を掘り込んだままの状態である。葬道は簡式を呈す。	0	0	0
16号墓	掘込墓	6.21	1.34	ドーム状	岩盤を掘り込んで造る。墓室内は岩盤を掘り込んだままの状態である。葬道はなく、正面は石灰岩切石で塞がれていたと考えられる。	0	0	0 石扇子・マンガン掛け藏骨器等が散乱する。
17号墓	亀甲墓	10.22	1.90	ドーム状	岩盤を掘り込み、壁は岩盤を利用し、縫みにモルタルを埋め込む。墓室内入口のみ方形の石灰岩切石を布積みし、モルタルで接合する。	5	1	1 藏骨器破片が僅かに残る。

### 3. 龜甲墓の形態的特徴

ここでは、調査で確認した亀甲墓の外観と墓室の造りについて整理する。調査で確認した亀甲墓は、丘陵西側から順に2・3・17・5・8号墓の計5基である。

亀甲墓の外観については、眉石の形状、ボージと墓庭から構成される墓の平面形に焦点をあて、これらの各亀甲墓における形態差をまとめた。亀甲墓の形態差については、眉端部のハネ具合から宜野湾市内の亀甲墓の編年が試案されており（奥屋ほか 1989、伊藤 2008）、当古墓群における亀甲墓についても同様の手順に従い、眉各部位の比率とボージ・墓庭の形状から亀甲墓を整理した。整理するにあたり、便宜的に眉及び墓平面形の各箇所を記号化し、その凡例については第6表に示した。また、各箇所の相対比により眉のハネ具合や古墓の平面形状を表現することを試み、その計算式と数値により示される結果については第7表に示し、各古墓の導き出された数値については第8表に示した。

まず、第7表の計算式に倣い墓上面観における各古墓の比率を求めるに、いずれの亀甲墓もボージの形状  $[\alpha : \beta, \gamma / \beta]$  は 1:1.1、1/2.0 前後の値を示し正円に近い値であり、庭を含めた墓全体の平面形状  $[W/(a+d)]$  は 1/2.0 前後で縦長である。墓庭については、各古墓とも平均的に幅と奥行きは 5m 内でほぼ正方形に近い値を示すが、5号墓は幅と奥行きに 1m の差があり縦長の長方形である。5基の亀甲墓の眉のハネ  $[a/b]$  は、いずれも約 1/2 であり共通する値を示している。他の眉正面観についても近い値を示すが、眉端部の長さの比率  $[a/B]$  に関しては、各古墓に共通性は見られなかった。

墓室の造りについては、5・8号墓の天井は長方形の石灰岩の切石をアーチ状に組む巻幕であり、その他の2・3・17号墓の天井は石灰岩を掘り込んだままのドーム状を呈する。また、墓室内に用いられる石灰岩の形状についても差異が見られ、5・17号墓は丁寧に方形に切られた均一の石灰岩を用い、特に5号墓の墓室内には丁寧に面取りされた定型的な石灰岩が用いられている。それ以外の墓は不定形の石灰岩を主に用いている。また、5号墓には墓室内正面壁に墓誌が書き記されており、大正9年（西暦1920年）に落成したことがわかる。その他の墓には墓誌がなく正確な築造年代は不明である。

以上のように、今回調査した5基の亀甲墓については、眉及び墓上面観の形態的特徴において共通性が多く確認できた。これらの形態的特徴の共通性から、5号墓の築造年代である大正9年（西暦1920年）を指標として他の墓の築造年代を考えると、他の亀甲墓も5号墓と同じく近い時期に築造された可能性が高い。

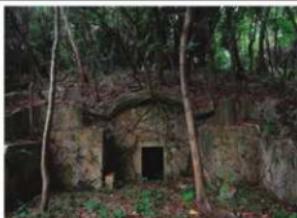
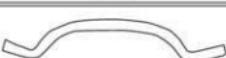
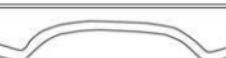
第6表 眉とボージ・墓庭各部位の凡例

対象	記号	部位
眉正面	A	眉頂部の高さ
	B	眉全長
	a	眉端部の厚さ
	b	眉ハネ部分の長さ
墓平面	$\alpha$	ボージの縦軸の長さ
	$\beta$	ボージの横軸の長さ
	$\gamma$	白（ウーシ）間の距離
	d	墓庭の縦軸の長さ
	w	墓庭の横軸の長さ

第7表 眉とボージ・墓庭における各部位の比率

部位	計算式	形状	模式図
眉正面	$a/b$	I に近づく程 (bが小さい程)、眉端部が高く反り上がる。	
	$a/A$	I に近づく程 (Aが小さい程)、眉端部の反りが矮小される。	
	$a/B$	I に近づく程 (Bが小さい程)、眉端部の長さが強調される。	
	$A/B$	I に近づく程 (Bが小さい程)、眉上部の丸味が強調される。	
墓平面	$\alpha : \beta$	$\alpha$ と $\beta$ に近づく程、ボージの形状は正円に近づく。	
	$\gamma / \beta$	I に近づく程 ( $\beta$ が小さい程)、ボージの平面形はU字形を呈す。	
	$W/(a+d)$	(a+d) が大きくなる程、墓全体の平面形は縦長を呈す。	

第8表 調査における亀甲墓の類型

番号	墓の向き	正面外観	計測値	備考
2号墓	南南西		 $a/b \approx 1/2, a/A, a/B, A/B \approx 1/3, 1/15, 1/6$ $\alpha : \beta \approx 1 : 1.1$ $\gamma / \beta \approx 1/1.9$ $w / (\alpha + d) \approx 1/2.0$ $墓口 0.46 m^2$	
3号墓	南南西		 $a/b \approx 1/2a/A, a/B, A/B \approx 1/2, 1/14, 1/7$ $\alpha : \beta \approx 1 : 1.2$ $\gamma / \beta \approx 1/1.9$ $w / (\alpha + d) \approx 1/1.8$ $0.59 m^2$	
17号墓	南南西		 $a/b \approx 1/3, a/A, a/B, A/B \approx 1/3, 1/19, 1/7$ $\alpha : \beta \approx 1 : 1.1$ $\gamma / \beta \approx 1/2.0$ $w / (\alpha + d) \approx 1/2.2$ $0.49 m^2$	
5号墓	南南西		 $a/b \approx 1/2, a/A, a/B, A/B \approx 1/3, 1/20, 1/7$ $\alpha : \beta \approx 1 : 1.1$ $\gamma / \beta \approx 1/2.1$ $w / (\alpha + d) \approx 1/2.1$ $0.43 m^2$	墓誌「大正9年落成」
8号墓	南南西		 $a/b \approx 1/2, a/A, a/B, A/B \approx 1/2, 1/15, 1/7$ $\alpha : \beta \approx 1 : 1.1$ $\gamma / \beta \approx 1/2.2$ $w / (\alpha + d) \approx 1/1.9$ $0.55 m^2$	

#### 4. 挖込墓の特徴

今回、調査を行った掘込墓は9基で、このうち11・12・13・15号墓は墓庭を伴い、墓室内の棚や墓口、羨道の形態が特徴的であった。したがって、ここでは各掘込墓の墓庭の様子、墓口や羨道、墓室内の棚の形状や石積みの技法についてまとめる。

**11号墓** 11号墓は周囲より流れ込んだ土砂や石灰岩礫により墓庭や墓口が埋まっている状態であったが、古墓の正面や墓口、墓庭に崩壊した様子は窺えなかった。墓庭は東側に隣接する12号墓と共有しており、平面形は幅8.9m×奥行き7.1mの長方形であり、庭開いや墓門に石積みは施されず、石灰岩岩盤を掘り下げ、その壁面を庭園として利用している。また、11号墓と12号墓の間には土砂や礫が流れ込んでおり、石積みなどの境界は確認できなかった。古墓の正面は石灰岩岩盤を垂直になるように削り面を作りだし、石積みや漆喰などによる装飾は施されない。墓口は開けられており、墓口を塞ぐための門石や香炉は確認できなかった。墓口の構造は掘り込んだ石灰岩岩盤を方形に整形しており、墓口・羨道に石積みは施されない。墓室の平面形は方形で、シルヒラシには石灰岩の小礫が敷き詰められている。また、正面と左右に墓室内壁面を掘り込んで出窓状の棚を作る。棚は正面と左側の棚は方形に掘り込まれ、右側の棚は梢円形に掘り込まれ、右側の棚のみに相方積みの縁石が施される。遺物は墓口付近と墓室内にマンガン掛けの甕型蔵骨器の破片が少量散らばっており、遺骨などその他の遺物は確認できなかった。



墓正面



墓庭(正面左側)



墓室内正面



墓室内右棚

図版5 11号墓写真

**12号墓** 12号墓は「坊主の墓(ボージバカ)」であることが聞き取り調査により確認されている(呉屋ほか 1981・1989)。墓庭は11号墓と共有しており、特徴については11号墓の概要を参照されたい。古墓の正面は、11号墓と同様に石積みや漆喰などによる装飾は施されないが、墓口と墓室を繋ぐ羨道には石積みが施されている。墓口は開けられており、墓口を塞ぐ門石や香炉は確認できなかった。また、墓口は流れ込んだ土砂により大半が埋まっているが、施されている石積みに崩壊した様子は窺えない。羨道の造りは、天井に4枚の石灰岩の切石を墓口から並べており、壁に施された石積みにより支えられていて、羨道の全長は2.5mと他の掘込墓のものより長く特徴的である。この羨道は中程で段差を設けて狭くしており、これは墓口を閉める際に門石を留める役割を持っていて、この部分の天井の角は切り石を丁寧に削りカーブを作っている。壁の石積みは墓口から門石・香炉石止めまでは相方積みが、これより墓室内までは布積みが施されており、壁の内側には石灰岩の小礫が裏込めとして詰められている。墓室内の平面形は方形で、シルヒラシには破碎した石灰岩の小礫が敷き詰められている。墓室内の正面と左右には出窓状の棚があり、これらは石灰岩岩盤を楕円形に掘り込んで造られている。棚には縁石が施され、正面の棚は相方積み、左右の棚は布積みで施される。また、棚の高さは正面と左右で異なっており、正面の棚が左右の棚より一段高くなっている。遺物は墓室内にマンガン掛けの甕型蔵骨器の破片が散在しており、遺骨などその他の遺物は確認できなかった。



11・12号墓遠景



12号墓正面



墓室内正面



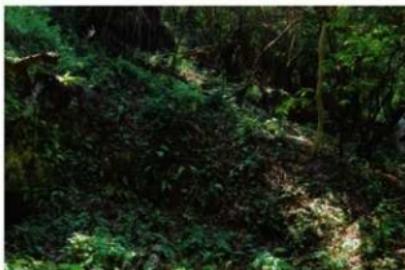
羨道

図版6 12号墓写真

**13号墓** 13号墓は石灰岩岩盤を掘り込み、墓庭と墓室を形成している。墓庭には周囲より土砂が流れ込んでおり、その土砂により墓口の半分は埋まっている。墓庭の平面形は幅5.5m×奥行き7.1mの長方形であり、庭園いや墓門に石積みは施されず、掘り込んだ石灰岩の面を壁としてそのまま利用している。古墓の正面は掘り込んだ石灰岩岩盤を垂直になるように削り、石積みや漆喰などによる装飾は施されない。墓口は開いており、墓口を塞ぐための門石や香炉は確認できなかった。また、墓口には12号墓と同様に石積みが施されているが、天井と墓庭側の壁の石積みが崩壊しており、積まれていたと思われる切石が墓道内に流れ込んでいる。墓室側の羨道の壁は相方積みが施されており、その内側には礫が裏込めとして詰められている。墓室内の平面形は方形で、シルヒラシには破碎した石灰岩の小礫が敷き詰められている。墓室の正面・左右には出窓状の棚があり、これらは石灰岩岩盤を掘り込んで造られ、縁石が施されている。形状はすべて梢円形に掘り込まれ、縁石もすべて相方積みで施される。また、棚の高さは正面と左右で異なっており、正面の棚が左右の棚より一段高くなっている。遺物は墓室内に石灰岩製の御殿型蔵骨器やマンガン掛けの甕型蔵骨器が多量に散在しており、完形の蔵骨器や蓋も見られ、蔵骨器の中に遺骨の入ったものも確認できた。



13号墓正面



墓庭(正面右側)



墓室内正面



墓室内左棚

図版7 13号墓写真

**15号墓** 15号墓の正面と墓口は石灰岩岩盤を掘り込みその面を壁として利用している。墓庭の平面形は幅5.9m×奥行き6.3mで平面形は長方形をしており、墓庭は墓口から墓門にかけて傾斜しており、周囲の様子から判断すると、この傾斜は土砂の流れ込みによる堆積ではないと考えられる。また、庭園は掘り込んだ石灰岩の面を壁として利用しているが、墓門には石灰岩の切り石を相方積みで積み上げており、石積みの裏込めの小礫が左側の庭園の一部で確認できる。墓口は石灰岩岩盤を掘り込み、墓口や狭道に石積みを施さない。墓口の寸法は幅2.65m×高さ3.65mと調査した古墓の中でも大きく墓口を塞ぐための門石や香炉は確認できなかった。墓室内に棚は無く、天井や壁は掘り込んだ石灰岩の面をそのまま利用している。墓室の平面形は梢円形で、床面も成形されず凹凸が目立つ。遺物は墓室内では確認できなかったが、墓石や墓門付近に石灰岩製の御殿型藏骨器やマンガン掛けの甕型藏骨器の破片が確認できた。



15号墓正面



墓庭(正面左側)



墓室内正面



墓口

図版8 15号墓写真

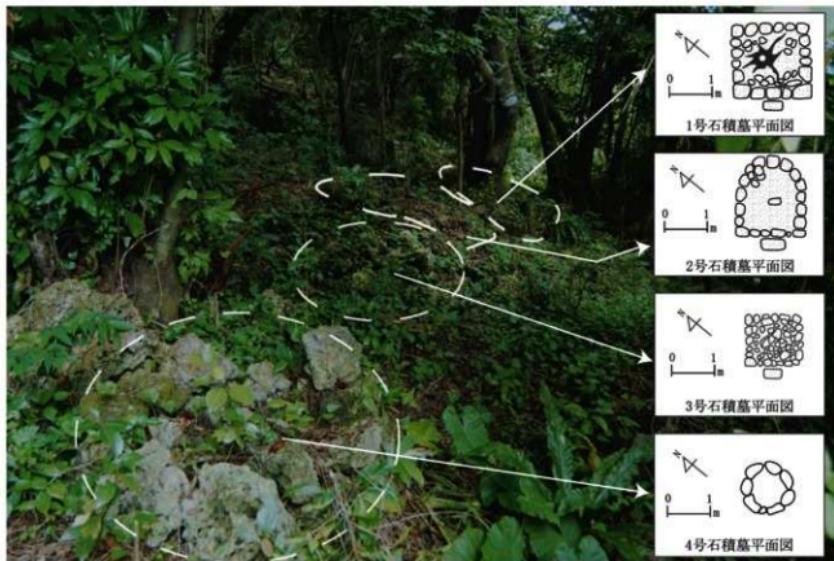
## 5. 石積墓

普天間フィールー丘陵の南側斜面には、分布する古墓群より低い位置に方形や円形等に組まれた石積みが一列に並んでいる。これらは「標石を持つ石積墓」としてこれまでの調査で3基確認されており、石積墓の特徴と状況について報告されている(呉屋ほか1989)。

これまでの報告では、南西を正面とする特異な石積墓を3基確認しており、これらは南東より1・2・3号石積墓と付けられている。3基の石積墓の平面形については、1・3号石積墓は略方形を、2号石積墓は半円形を呈し、これら石積墓の石積みの手法には3基とも石灰岩の切り石を主体とする布積みと雜積が用いられ、1号から3号に向けて雜積みが主な手法になるとされている。このほか石積墓に伴うものとして立石と香炉状の角石、覆石について報告されている。立石は2・3号石積墓の頂部には石灰岩製のものが据え付けられていることが確認されており、1号石積墓についても恐らく立石はあったであろうとされているが樹木により確認できず、香炉状の角石については3基の石積墓の南西に確認されており、この香炉状角石の前面には火焼けが確認されている。また、3号石積墓は他の石積墓と異なり上面に覆い石が施されていることが確認されている。

今回、改めて調査を実施したところ、報告時の調査より年月が経過していることから、上記のように報告されている石積墓の状況と現在の石積墓の状況が変化していることが確認できた。また、伐採・清掃を行い、周辺を精査したところ、3号石積墓の西側で石積墓が新たに1基確認できた。このことから今回の調査の成果として、報告にまとめられている石積墓の状況と現在の石積墓の状況を比較し、さらに新たに得られた情報として各石積墓の寸法を加え、今回の調査によって新たに確認できた石積墓と1・2・3号石積墓の特徴についてまとめた。

各石積墓の名称については前回の調査に倣い、南東より1・2・3号石積墓とし、今回新たに確認した石積墓は4号石積墓とした。



図版9 1~4号石積墓遠景 南西より(奥から順に1・2・3・4号石積墓)

**1号石積墓** 1号石積墓は、石積みの中央より自生している樹木が影響し石積みが崩壊している。この崩壊は前回の調査よりも進んでおり、崩れ落ちたと思われる切石が周辺で確認できた。石積墓は北側が流れてきた土砂により埋まっており、北側の石積みの様子や高さは確認できなかった。1号石積墓の平面形は方形で、石灰岩の切石を布積みで積み上げ、寸法は1辺が1.9mである。1号石積墓の南側には香炉状の角石が確認できたが石積みの崩壊により倒れており、立石の有無については今回の調査においても樹木により確認できなかった。



1号石積墓全景（北東より）



1号石積墓近景（南より）

図版 10 1号石積墓外観

**2号石積墓** 2号石積墓は石積みの一部に崩壊がみられ、積まれていたと思われる切石が周辺で確認できたが、その規模は小さく前回の調査より変化は少ない。2号石積墓の北側は流れてきた土砂により埋まっており、北側の石積みの様子や高さは確認できなかった。2号石積墓の平面形は北東側に梢円部分を持つ半円形で、石灰岩の切り石を布積みで積み上げ、寸法は縦2m×横1.7mである。石積墓の頂部には立石が確認でき、立石の周囲には立石を支えるための10cm大の石灰岩の礫が巡っている。また、伐採・清掃を行い石積墓の周辺を精査したところ、前回の調査で確認された香炉状の角石は確認できなかったが、南側に階段状の石積みを新たに確認した。この階段状の石積みについては、今回の調査ではその性格を把握するまでには至らなかった。



2号石積墓全景（北より）



2号石積墓遠景（南より）

図版 11 2号石積墓外観

**3号石積墓** 3号石積墓は前回の調査時よりも石積みの崩壊が進んでおり、周辺には積まれていたと思われる切石や小礫が散在しており、特に北側の石積みは崩壊が進んでいることから石積みの様子が明確ではない。3号石積墓の平面形は長方形で、石灰岩の切り石と小礫を布積みと野面積みを併用して積み上げている。寸法は縦1.6m×横1.7m、高さは石積みが崩壊しているため計測できなかった。これら積まれている石の形や大きさは様々で、薄く大きめの長方形や立方形のものがあり、大きさも10cm大の礫や縦40cm×横15cmの薄い切石などが確認できた。前回の調査では立石と石積墓上面の覆石、香炉状の角石が確認されているが、立石と覆石は石積みの崩壊が進んでいるため確認できず、香炉状の角石も確認できなかった。



3号石積墓全景（南より）



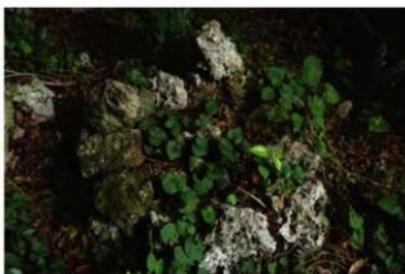
3号石積墓遠景（南西より）

図版 12 3号石積墓外観

**4号石積墓** 4号石積墓は3号石積墓の西側にある13号墓の前方に位置しており、3基集中して並んでいる他の石積墓とはやや離れている。4号石積墓は他の石積墓に比べ規模が小さく、積み方は雑であるが、石積みの崩れた様子は確認できず良好な状態である。平面形は円形で、30cm大の石灰岩の礫を野面積みで積み上げ、寸法は縦1.1m×横1m、高さ0.3mである。他の石積墓で確認されている香炉状の角石や立石は確認できなかったが、中央には礫が散在しており、立石が立てられていた可能性がある。



4号石積墓遠景（奥13号墓・前4号石積墓・南より）



4号石積墓全景（南より）

図版 13 4号石積墓外観

### 第3節 まとめ

詳細分布調査では、掘込墓9基、亀甲墓5基、破風墓2基、型式不明3基、石積墓4基を確認した。本報告ではこれらの古墓について、形態的特徴から当古墓群における形態的な差および亀甲墓の築造年代の推定を試みた。

亀甲墓の築造年代の推定については、宜野湾市内の亀甲墓の眉形態による編年が試案されており（呉屋ほか1989、伊藤2008）、これらの手順を参考に行った。今回の調査では亀甲墓を5基確認し、これらの眉のハネ [a/b] は顕著であり、同様に1/2の比率を示した。各古墓は、他の眉正面における形態比についても同様の値を示したが、眉端部の長さを示す値 [a/B] は共通性が見られなかった。また、墓の平面形態としてボージと墓庭の形態比を求めたところ、各古墓ともボージは正円形に近く、墓庭を含めた墓域の平面形は縦長の長方形であった。以上の成果から、今回調査した亀甲墓については、形態的特徴に差異が少ないとから築造年代に大きな時期差ではなく、近い時期に造られた可能性が高いと考えられる。また、調査墓のうち5号墓については、墓誌から大正9年（西暦1920年）築造ということが判明しているため、これを指標とすると他の亀甲墓も近い時期に造られたと考えられる。さらに、これまでの調査から宜野湾市内の他の亀甲墓は、17世紀末～19世紀初頭にかけて築造されたものは【0.14、0.18、0.2】であり（呉屋ほか1989）、これらを分数に換算すると【≈1/7、1/6、1/5】の値であり、ハネ具合は低く扁平である値を示す。このことから宜野湾市内の亀甲墓を対象とすると、亀甲墓における眉形態の変遷は時代が下るにつれ扁平から屈曲へと変わっていく傾向が見込まれる。

掘込墓については、丘陵中央部に位置する11・12・13・15号墓の形態的特徴について整理した。これらの古墓は特徴として、11・12・13号墓は長方形の墓口と墓室内に出窓状の棚をもち、11号墓の右棚と12・13号墓の棚と墓口に石積みが施される。また、いずれの古墓も墓庭があり、13・15号墓のような定型的な方形のものと11・12号墓のように隣接する墓と共有するものがあり、規模も大きく造られている。15号墓の墓庭については、掘り込んだ石灰岩の面を庭園の壁として利用し、墓門には相方積みの石積みが施される。今回確認した掘込墓におけるこれらの特徴が時間的な前後関係を示すものかは明確ではない。今後、調査を重ね検討していかたい。

石積墓については、これまでの調査で報告されている1・2・3号石積墓を再確認し、今回の調査で3号石積墓の西側で新たに1基確認し、これを4号石積墓とした。石積墓は4基とも丘陵下段に並列する古墓群よりも低い位置に造られていた。これらの石積墓の平面形は方形、長方形、楕円部分をもつ半円形、円形で多様であり、その規模は1・2・3号石積墓の一辺がおよそ1.5m～2mの方形状を呈し、4号墓が直径約1mの円形である。1号石積墓付近では香炉と思われる切り石を再確認し、2号石積墓については、石積みの中央に立石を再確認し、南側に階段状の石灰岩の石積みを新たに確認した。これらの石積墓は、立地や形態、そして付随する施設として階段状の石積みや香炉、墓中央に配置される立石から、墓あるいは拝所としての機能を考えられるが、今回の調査ではこれらの性格を把握するには至らず、今後さらに調査を加え検討していかたい。

第9表 宜野湾市内の亀甲墓の眉形態比（呉屋ほか1989を参考に作成）

遺跡名	墓名	墓誌			眉形態比※	
		資料	年代			
			元号	西暦		
大山東方第V丘陵古墓群	上江家管掌の亀甲墓	墓室内石碑の沈刻	康熙三十八年	1699年	1/7	
赤道渡呂寒原古墓群	渡呂寒原第2号墓	墓室正面壁の墨書き	雍正四年	1726年	1/6	
赤道渡呂寒原古墓群	渡呂寒原第12号墓	ボージャー彌型銅骨器蓋の墨書き	乾隆二十三年	1758年頃	1/5	
宜野湾・神山シリガーラ古墓群	佐喜真亀甲墓	墓室正面の納骨施設の蓋の沈刻	乾隆五十八年	1793年	1/5	
赤道渡呂寒原古墓群	渡呂寒原第9号墓	墓室正面の納骨施設の蓋の沈刻	道光七～八年頃	1828年	1/5	

※今回の調査墓との比較を行うために数値の表記を変換している。

## 第IV章 普天間フィールー丘陵古墓群発掘調査の成果

### 第1節 発掘調査の概要

普天間フィールー丘陵古墓群の発掘調査は、キャンプ瑞慶覧地区内海軍病院移設に伴う開発予定範囲において、その直接的な影響を受ける4基の古墓について実施した。対象となる古墓は、第III章の詳細分布調査において確認した1~4号墓であり、これらの位置座標及び墓外観等の情報については第III章第3表を参照されたい。

調査対象となる古墓の墓型式は、1号墓は破風墓、2・3号墓は亀甲墓、4号墓は掘込墓である。これらの古墓の位置は、1~3号墓は丘陵南側の下段に並列しており、4号墓は丘陵北西側にある普天間川にかけての傾斜部にあり、いずれの古墓も丘陵の中腹を掘り込んで造られている。今回、発掘作業を行うにあたり、現地表面に木材、ガラス瓶や缶等の廃棄物が散乱していたため、これらを除去した後、作業を行った。発掘作業は各古墓とも中心軸を設定し、墓室内奥から墓域外にかけて中心軸から幅50cmのトレンチを設定し、この範囲を琉球石灰岩盤まで掘削した。トレンチ壁面では、現地表面と墓を造成する時に入れ込んだ造成層が確認できた。以下に、基本層序として詳細を記す。

#### 基本層序

I 層—現表土層。1~4号墓において確認できる。暗黒褐色土層。締まりが弱く、粘性はやや強い。

腐植土層で植物根や枯れ枝を含み、ガラス瓶や缶、マイマイの殻を多く含む。

II-a層—造成層。1~3号墓において確認できる。10~30cm大の石灰岩礫および小礫を主体とする。墓を構築する際 石灰岩岩盤上を整地するために入れ込んだと考えられ、墓庭内に厚く堆積する。

層下部には黒色土が少量混入する。

II-b層—旧表土。4号墓において確認できる。色調は暗褐色を呈し、薄く堆積する。

III 層—地山（島尻マージ）。色調は黄褐色である。

基盤層—琉球石灰岩



図版 14 発掘調査風景

## 第2節 発掘調査の成果

### 1. 遺構

**1号墓** 1号墓は普天間フィールー丘陵の南側に位置し、墓口は南南西方向に向く。墓型式は破風墓であり、丘陵を掘り込んで造られている。現状として墓門の右側が崩壊していた。墓は面取りされた石灰岩の切石を用い、墓の外形や壁面の整形には漆喰やモルタルが用いられている。墓庭の庭囲いにも石灰岩の切石を使用しており、布積みされている。また、左右の庭囲い外壁は石灰岩礫を野面積みする。墓庭内には割れた門石が置かれていた。三味台は石灰岩岩盤上に漆喰を敷いて仕上げる。

墓室は丘陵の岩盤を掘り込んで造られている。墓室内壁面は左右とも方形の切石を積み、目地はモルタルで接合し、天井は長方形の切石を用いてアーチ状に組む巻墓（マチバカ）である。これらに使用される切石は丁寧に加工しており、表面の凹凸は少ない。奥壁はノミ痕が残るような掘り込んだままの状態で、石灰岩岩盤が露呈しており、岩盤の溝みにモルタルを埋め込んで整形している。墓室内正面の棚は5段あり、左右の裾にも1段設ける。棚は縁石に切石を使用し、目地をモルタルで接合する。シルヒラシは長軸1.50m、短軸1.37mの方形で、破碎した石灰岩の小礫を敷く。

発掘作業は、墓の中心軸に沿って、墓室内奥壁から墓域外にかけて長さ約14m、幅50cmのトレーニングを設定し、石灰岩岩盤まで掘削した。層序は、基本層序のI層があり、その下層にII-a層（造成層）が墓庭から墓域外にかけて見られた。II-a層以下ではIII層（鳥尻マージ）は確認されず、最下層の石灰岩岩盤であった。最下層の石灰岩岩盤は、墓庭内においては地表面から約10cmの深さにあるが、墓門から墓域外にかけては急激に下降し深度1.2mまで達する。そのためトレーニング壁面では墓域外にII-a層が厚く堆積する状況が確認できた。墓室内に造成層ではなく、石灰岩岩盤上に棚及びシルヒラシを造っている。棚は縁石として石灰岩を並べ、裏込めに破碎した石灰岩の小礫を入れて造り、シルヒラシは岩盤上に破碎した石灰岩の小礫を敷く。今回、トレーニング内から遺物は出土せず、すべて墓域内外での表採であった。



墓正面



墓室内

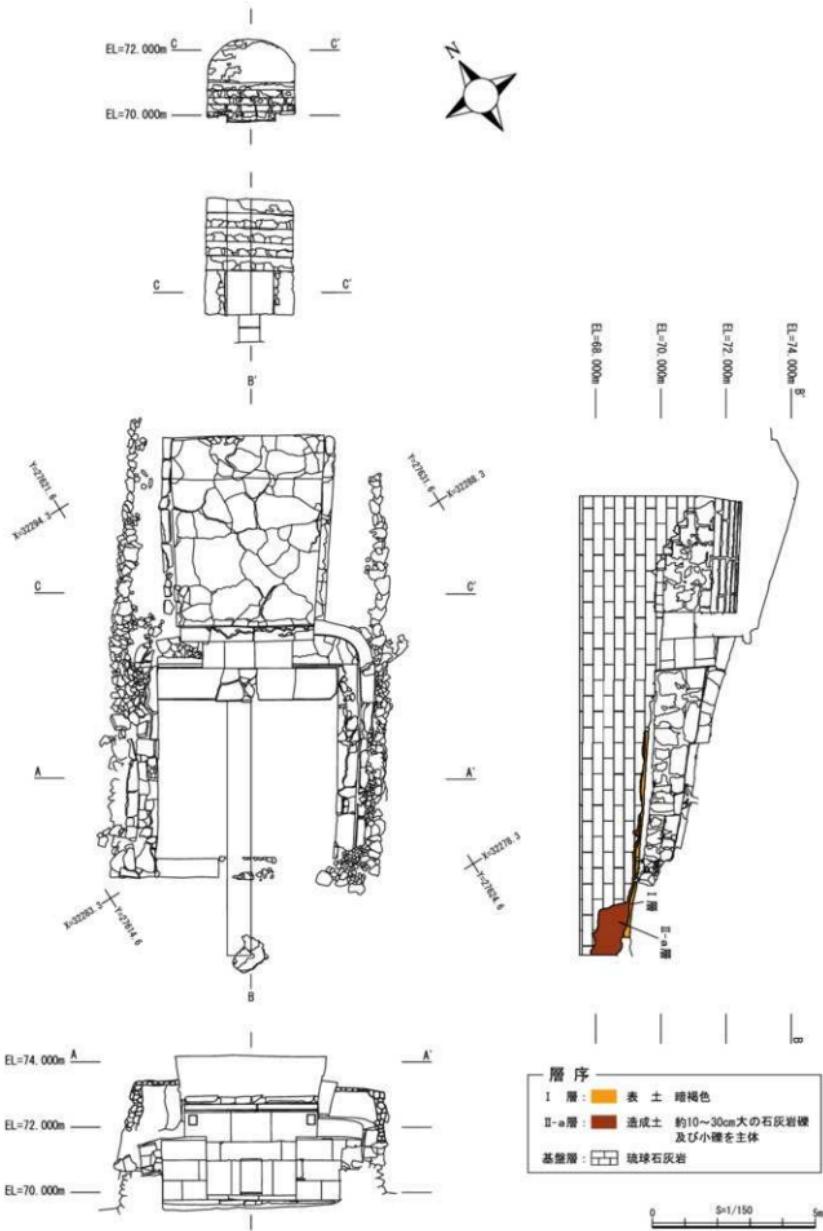


墓室内棚掘削状況



庭囲い外壁

図版15 1号墓写真



**2号墓** 2号墓は普天間フィールー丘陵の南側に位置し、墓は南南西方向に向く。2号墓は亀甲墓であり、正面右側の庭開いは3号墓と共有している。墓は面取りされた石灰岩の切石を用い、墓の外形や壁面の整形には漆喰やモルタルが用いられている。三昧台の片隅には香炉石が置かれた状態であった。

墓室は丘陵の岩盤を掘り込んで造られており、墓室内左側壁は切石を積み、目地はモルタルを用いて整えられ、対面の右側壁は掘り込んだままの状態で岩盤が露呈し、窪みにモルタルを埋め込んで整形している。棚は5段あり、1段目は墓口に向かってコの字形に広がる。シルヒラシは長軸1.50m、短軸1.25mで、破碎した石灰岩の小礫を敷く。天井は岩盤を掘り込んだままの状態でドーム状を呈し、窪みにはモルタルを埋め込んで整えている。

発掘作業は、墓の中心軸に沿って墓室内奥壁から墓域外にかけて長さ約14m、幅50cmのトレンチを設定し、石灰岩岩盤まで掘削した。層序は基本層序のI層があり、その下層からII-a層（造成層）が墓庭から墓域外にかけて堆積し、層下位には黒色土が混じる。II-a層以下ではIII層（島尻マージ）は確認されず、石灰岩岩盤であり、岩盤は墓室内から墓門にかけて傾斜する。墓室内にII-a層ではなく、石灰岩岩盤上に棚及びシルヒラシを造っている。棚は岩盤上に表面を整えた石灰岩を並べて縁石とし、裏込めに破碎した石灰岩の小礫を入れて造っている。シルヒラシは、掘削したところ岩盤上に小礫のみ堆積していた。墓は三昧台まで丘陵の傾斜に沿って岩盤上に構築されており、そこから墓門にかけて岩盤が下降するため、造成し丘陵の段差を10~30cm大の石灰岩礫で埋めている。この造成により、2号墓は現地表面よりも2.4mほど高い位置に造られている。遺物は墓域外で表探した沖縄産施釉陶器のみで、墓室内及びトレンチ内からは得られなかった。



墓正面



墓庭トレンチ（正面左側より）

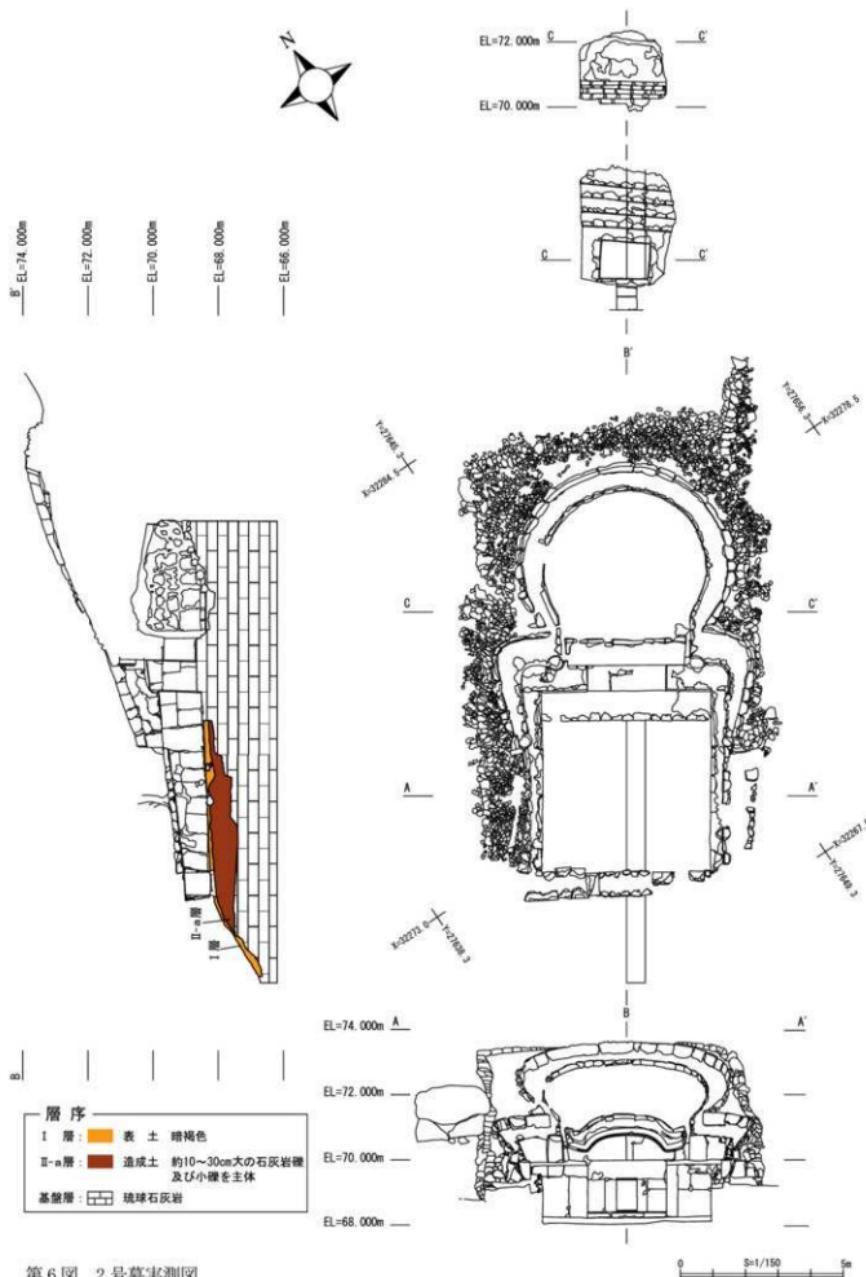


シルヒラシ掘削状況



香炉石

図版 16 2号墓写真



第6図 2号墓実測図

**3号墓** 3号墓は普天間フィールー丘陵の南側に位置し、2号墓の東側に隣接して造られており、型式は2号墓と同じく石灰岩岩盤を掘り込み、墓正面と屋根を亀甲型に装飾した亀甲墓である。古墓は全体的に漆喰で成形しているが、これが造られた当初からか補修によるものかは確認できなかった。

調査するにあたり、古墓の清掃及び周辺の草木の伐採を行い使用時の状況を検出した結果、古墓の様相が明らかとなった。墓庭の庭囲いは、西側の2号墓と共有する部分では、3号墓の庭囲いの漆喰が2号墓の石積みの上に張られていることから、3号墓は2号墓が築造された後に造られたと考えられる。また、3号墓の正面右側庭囲いの外壁は野面積みで施されており、この石積みが墓の後方まで延びていることが確認できた。墓正面の三味台は2段設けられており、正面左側にはカビアンジが設けられていた。

墓室内は棚とシルヒラシが設けられており、棚は石灰岩を掘り込み切石を積んで形成し、奥に5段と左右に1段ずつ造られる。シルヒラシは長軸1.82m、短軸1.45mであり、破碎した石灰岩の小礫を敷く。これらの棚の段数やシルヒラシの規模・形状は、隣接する2号墓や詳細分布調査（第III章参照）で確認した当古墓群における亀甲墓や破風墓でも同じ構造をしている。天井は掘り込んだ石灰岩をそのまま利用しドーム状に成形され、所々漆喰やモルタルで補修されている。

発掘作業は、清掃終了後に墓の中心軸に沿って墓室内奥壁から墓域外にかけて長さ約18m、幅50cmのトレチを設定し、墓室内・墓庭・墓域外の掘り下げを岩盤まで行い層序を確認した。層序は現表土をI層とし、墓庭を平坦にするために造成した石灰岩の礫層をII-a層とした。造成層であるII-a層は、主に約20~30cm大の石灰岩の礫が詰められていた。II-a層以下ではIII層（島尻マージ）は確認されず、最下層の石灰岩岩盤であった。

今回、遺物はトレチ内からは検出されなかったが、伐採・清掃時に表探することができた。得られた遺物は本土産磁器や沖縄産陶器が主で、完形に近い遺物も得られた。しかし、得られた遺物は表探のみであつたため、墓の使用された時期については確認できなかった。



墓正面



庭囲い(正面右側)

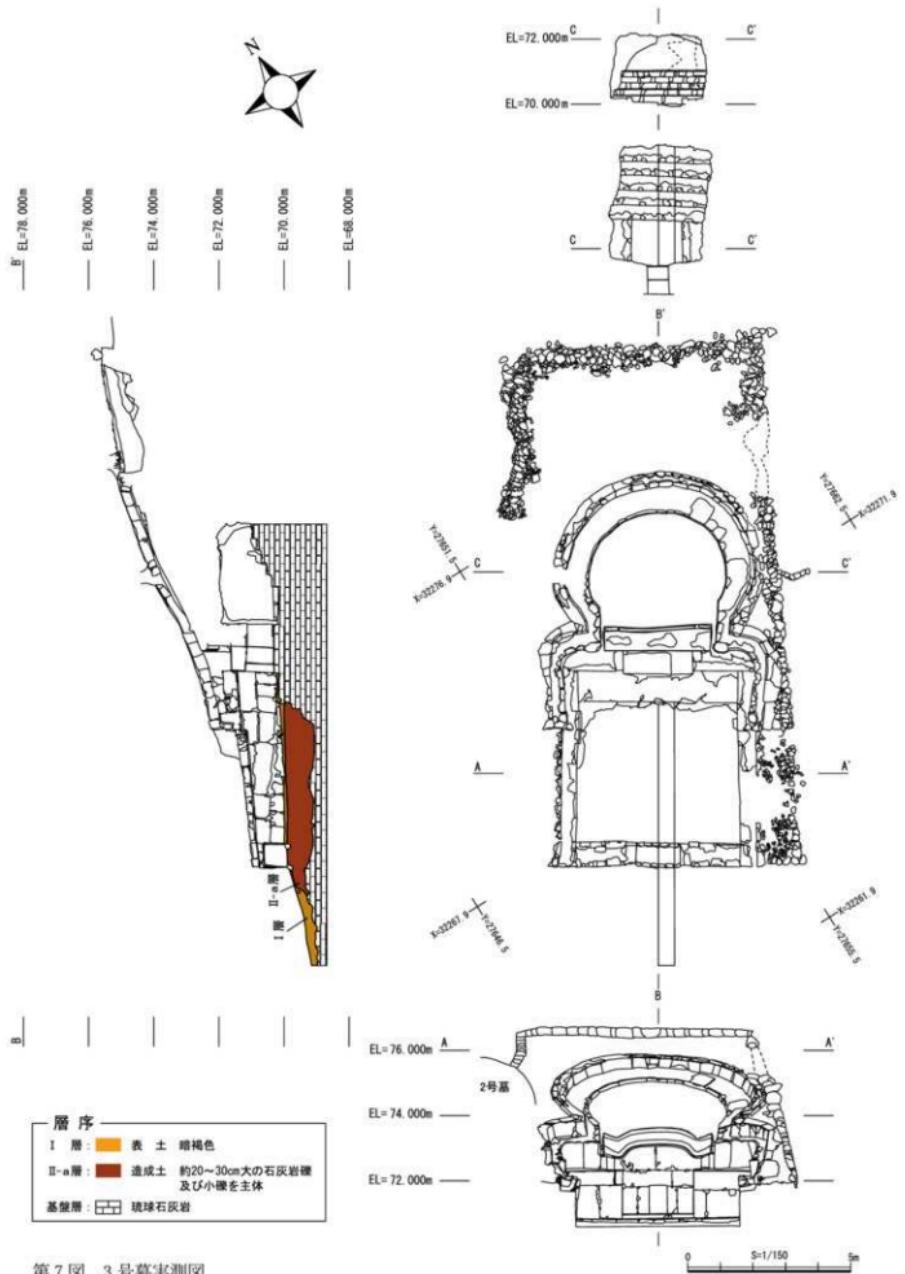


墓室内正面



墓庭トレチ壁面

図版17 3号墓写真



第7図 3号墓実測図

**4号墓** 4号墓は普天間フィールー丘陵の北西側に位置し、墓口は南を向いている。墓の型式は掘込墓で、基盤の石灰岩を掘り込んで造られている。墓口付近では門石として積まれていたと思われる。石灰岩礫が散乱しており、これらは墓口を開ける際に破壊されたものと考えられる。

4号墓周辺は草木が繁生し、さらに戦後堆積したと思われる土砂や礫などが多くみられた。今回調査にあたり、使用時の様子を捉えるため草木の伐採と土砂の除去作業を行った。その結果、墓口に向かって左側には袖石、右側には墓門と思われる野面積みの石積みを検出した。しかし、それぞれ対称となる右側袖石と左側の墓門の石積みは、石灰岩の礫や土砂の流れ込みにより崩壊したと思われ確認できなかった。

墓室は石灰岩岩盤を掘り込みドーム状に成形しており、装飾は施されず石灰岩岩盤が露呈する。広さは幅約1.6m、奥行き約1.7m、高さ約0.8mと狭く、人が1人屈んでようやく入れるほどの広さである。床面は掘り込んだ石灰岩岩盤の上に砂礫を敷き詰めた造りになっている。

発掘作業は墓の中心軸に沿って、墓室内奥壁から南側にかけて長さ約9.4m、幅50cmのトレンチを設定し、岩盤まで掘り下げ断面で層序を確認した。層序はI層の現表土があり、主に石灰岩の礫や鉄などが多く含まれ、下層には墓が使用されていた時期に堆積したと思われるII-b層を確認した。II-b層以下は地山であるIII層（島尻マージ）を確認し、最下層は石灰岩岩盤であった。

層序の確認後に古墓の使用時の様子を確認するため、墓域内の客土であるI層をすべて除去した。その結果、II-b層上面で墓室内および墓口付近で遺骨がまとまって検出された。検出された遺骨の周辺で藏骨器などの遺物が検出されなかつたことから、これらの遺骨は墓を移す際に散らばつたものと思われる。その他の遺物は墓周辺の伐採およびI層掘削時に沖縄産袖陶器や本土産磁器等が得られたが、墓の使用時期と思われるII-b層からは時期を特定できる遺物は検出されなかつた。



墓正面



袖石(正面左側)

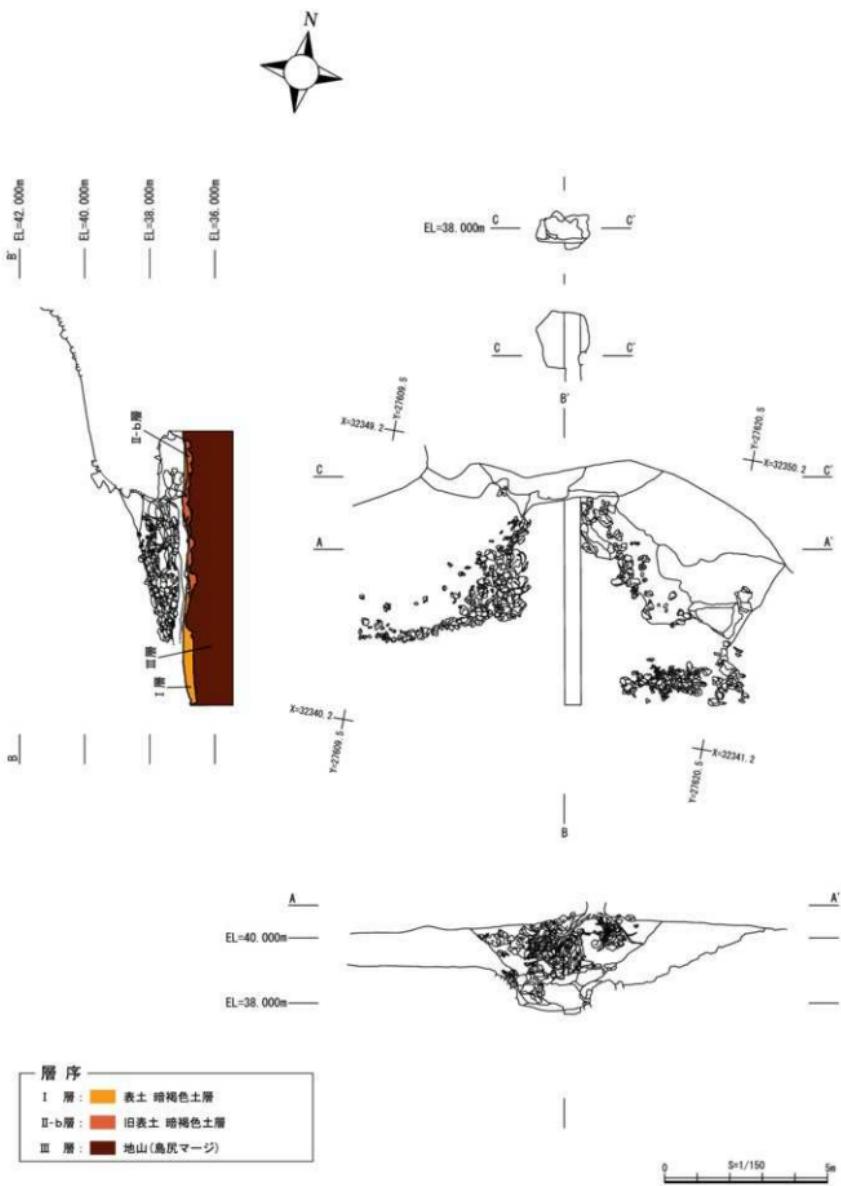


袖石(正面左側)



墓室内正面

図版18 4号墓写真



第8図 4号墓実測図

## 2. 遺物

今回の調査で得られた遺物の総点数は296点で、近代から現代に相当する遺物が主体である。出土状況はトレンチ内から出土した遺物は僅少で、ほとんどが墓庭内外における表探である。主な遺物の内訳は、蔵骨器15点、沖縄産施釉陶器20点、沖縄産無釉陶器109点、本土産磁器37点である。また、4号墓ではII-b層上面から遺骨が出土した。本節ではこれらの出土遺物の概要を記す。

第10表 出土遺物総点数表

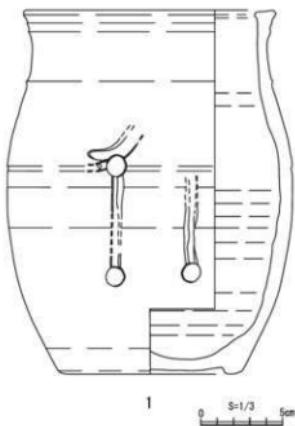
出土遺物	蔵骨器		沖縄産施釉陶器		沖縄産無釉陶器		本土産磁器		遺骨		貝		瓦		現代遺物		合計				
	73点	施釉	瓶	小瓶	壺	鉢	急須	不明	壺	小瓶	皿	瓶	タイル	不明	瓶	ガラス	レング				
墓No.1 墓底外表探 表探	6	3	2		2		2	25	2	1	1		1	3	4	11	2	128	179		
墓No.2 墓底外表探	2		3												1	2	2	51	5		
墓底外表探	1																	1			
墓底外表探	11					1												13	16		
墓底外表探	2																	2			
墓底外表探 II-b層上面						1									1			2	96		
合計	14	8	3	2	4	2	1	80	29	16	11	5	1	1	90	1	6	13	4	1	296
	15				20			109						37	90	1					

### (1) 蔵骨器【第9図、図版19】

調査で得られた蔵骨器は総計15点で、その内訳はアカムヌーの蔵骨器1点、陶製家形施釉蔵骨器片14点である。アカムヌーの蔵骨器については残りが良好であったため図化した【第9図】。本資料の胴部には浮文の屋文が装飾されているが、破損しているため全体像は不明である。また、胴部には墨で蓮の花と葉が描かれているが、その大半は消えかかっている。

第11表 蔵骨器観察表

図番号	器種	部位	口縁			観察所見			出土場所		
			口縁	器底	底盤	口縁	器底	底盤	墓No.3	墓底内	表探
第9 図 19	1	壺	口～底 15.2 22.4 11.2	アカムヌーの蔵骨器。頸部でくびれ、口縁部は直線的に立ち上がる。口縁部断面は三角形を呈する。星門は浮文であり、その両邊には墨で蓋の花と葉を描く。孔は穿たれていない。							



第9図 蔵骨器



図版19 蔵骨器

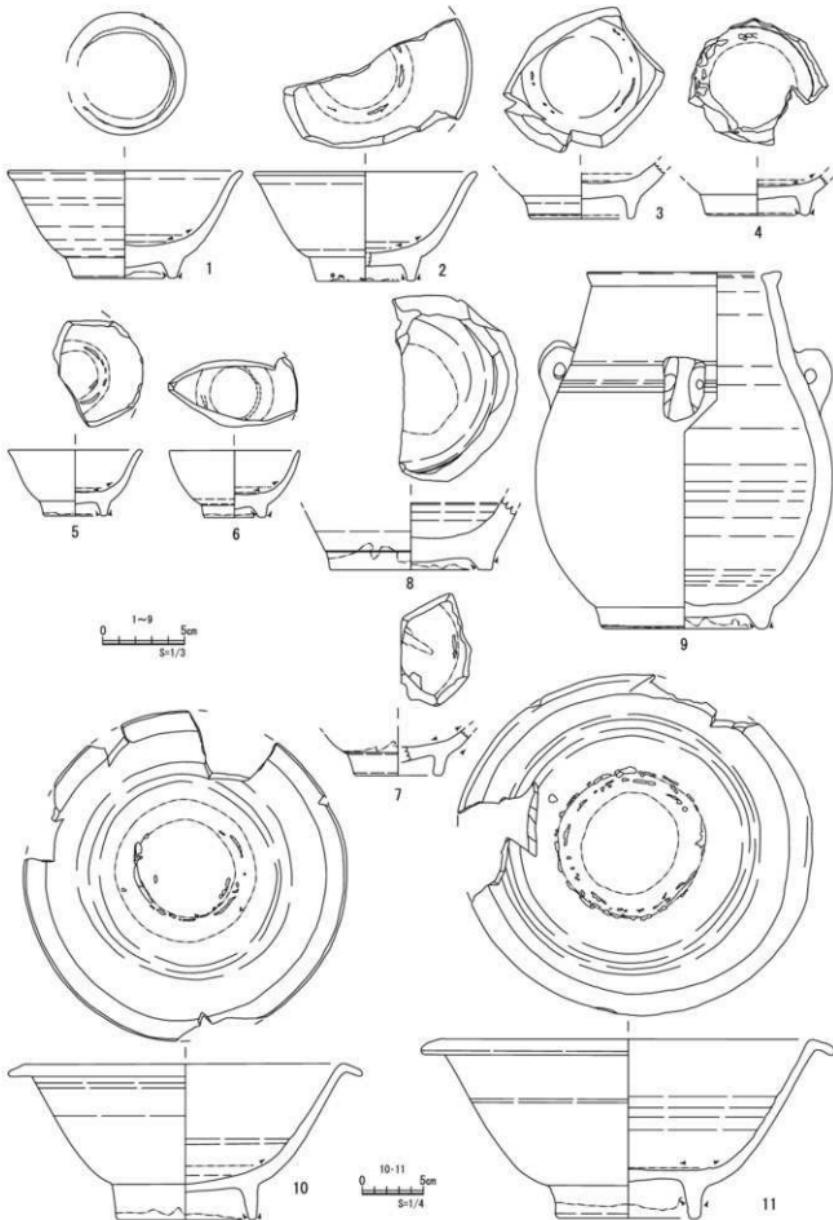
(2) 沖縄産施釉陶器・無釉陶器【第10-11図、図版20・21】

沖縄産施釉陶器は、碗・小碗・壺・鉢・急須の5器種が得られ、いずれも墓庭内外の表採であった。総点数は20点で、白化粧を施した碗が最も多く得られた。1・3は、器外面に呉須で点花文が描かれている。8・9は壺であり、9はほぼ原形に復元できたアンダーガーミである。また、ワンブーと呼ばれる鉢が4点得られており、そのうち残りが良い2点を図化した。

沖縄産無釉陶器は、今回得られた遺物の中で最も多く、総点数で109点得られた。すべて表採で得られ、殆どが壺や甕の胴部片であった。そのうち、壺の口縁部、耳、甕の底部を図化した。

第12表 沖縄産施釉陶器・無釉陶器観察表

図番号	器種	部位	口径	釉裏		観察所見	出土地	
			器高	底径				
図版20	碗	口～底部	14.0	単掛け	白化粧	口縁部は外反、口唇部は舌状を呈す。見込みには蛇の目状の釉刷ぎを施し、アルミナが付着する。高台内には若干円錐状に盛り上がる。	墓No1	表採
			6.6					
			5.9					
	碗	口～底部	13.6	単掛け	白化粧	口縁部は緩く外反、口唇部は舌状を呈す。見込みには蛇の目状の釉刷ぎを施し、アルミナが付着する。外面には点花文を描く。	墓No1	表採
			7.7					
			5.2					
	碗	底部	—	単掛け	白化粧	見込みには蛇の目状の釉刷ぎを施し、アルミナが付着する。高台内は円錐状に盛り上がり、内外にアルミナが少量付着する。外面には点花文の一筋が残る。	墓No2	墓庭外表採
			—					
			5.6					
	碗	底部	—	単掛け	白化粧	見込みには蛇の目状の釉刷ぎを施し、アルミナが多く付着する。	墓No1	表採
			—					
			6.1					
	小碗	口～底部	7.8	単掛け	白化粧	口縁部は緩く外反、口唇部は舌状を呈す。見込みには蛇の目状の釉刷ぎを施し、アルミナが付着する。	墓No1	表採
			4.0					
			3.2					
	小碗	口～底部	8.0	単掛け	白化粧	口縁部は直口、口唇部は舌状を呈す。見込みには蛇の目状の釉刷ぎを施し、アルミナが付着する。高台内は輪郭が厚く、盛り上がる。	墓No1	表採
			4.1					
			3.1					
	碗	底部	—	単掛け	鉄釉	フィーガキーによる施釉で、内部は鉄釉で同心円に描く。同心円内には鉄釉が重ねかかっている。	墓No1	表採
			—					
			4.6					
	壺	底部	—	単掛け	鉄釉	内外面、高台内面に鉄釉が掛かる。外面のみ透明釉を重ねる。見込み、高台下部は遮蔽する。	墓No1	表採
			—					
			9.8					
	壺	完形	11.9	単掛け	鉄釉	瓶耳を四方に貼り付け。口縁部は三角形を呈す。胴部に最大径を持つ。鉄釉を内外に施釉する。足付にはアルミナや砂が多く付着する。	墓No1	表採
			21.8					
			9.4					
	鉢	完形	21.0	掛け分け	白化粧 + 鉄釉	口縁部は逆一字字形に屈曲する。鉄釉を高台まで施釉し、内面は白化粧を施す。口縁部は鉄釉を掛けける。口縁部は鉄釉を掛けける。	墓No2	墓庭外表採
			10.5					
			9.0					
	鉢	完形	23.4	掛け分け	白化粧 + 鉄釉	口縁部は逆一字字形に屈曲する。鉄釉を高台まで施釉し、内面は白化粧を施す。口縁部は鉄釉を掛けける。見込みには蛇の目釉刷ぎを施し、アルミナが付着する。	墓No3	墓庭内表採
			11.3					
			8.7					
図版21	壺	口縁部	27.1	無釉		口縁部断面は五線形を呈する。口唇部には幅5mmの工具痕が残る。頸部から胴部にかけて縱方向に工具による調整痕が残る。輪郭整形成。色調は肉色とも明橙褐色で一部灰暗褐色。	墓No4	II-b層上面
			—					
			—					
	壺	口縁部	12.8	無釉		口縁部断面は三角形を呈する。口縁部はきつく外反し、輪郭整形成。内面は輪郭整形成後に幅5mmほどの抛工具で横・縦方向に撫でる。	墓No1	表採
			—					
			—					
	壺	耳	—	無釉		胴上部に貼り付けられた耳。耳の反対内面には指の押圧痕が残る。色調は肉色とも灰暗褐色。	墓No1	墓庭外表採
			—					
	壺	底部	—	無釉		輪郭整形成。底面内面には指の押圧痕が残る。内面は輪郭整形成の縁に羅列に残る。色調は、外側は灰炭茶褐色、内側は灰黒褐色。	墓No1	墓庭外表採
			26.6					



第10図 沖縄産施釉陶器 碗(1~4・7)、小碗(5~6)、壺(8~9)、鉢(10~11)



図版20 沖縄産施釉陶器 碗(1~4・7)、小碗(5~6)、壺(8~9)、鉢(10~11)

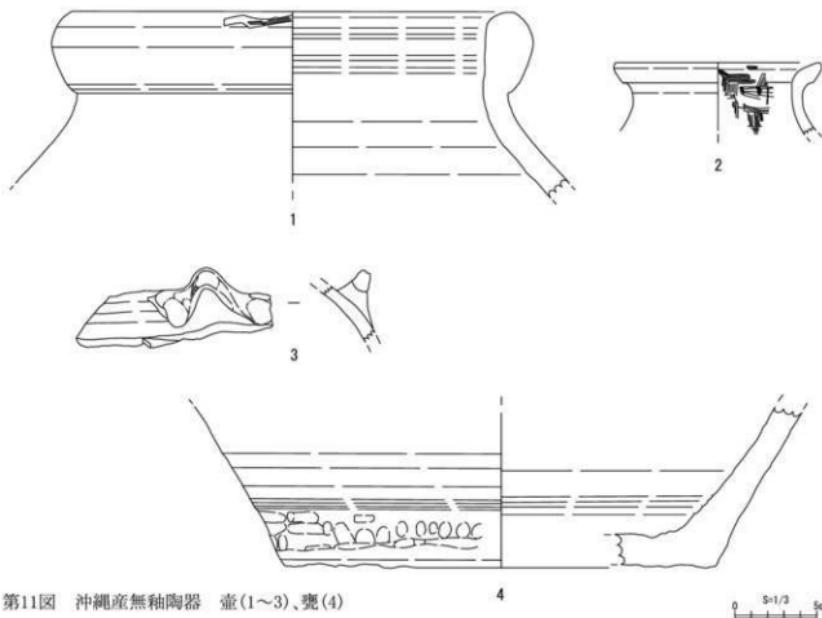


図11図 沖縄産無釉陶器 壺(1~3)、甕(4)



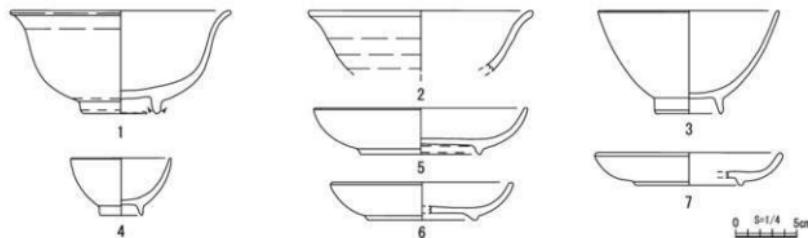
図版21 沖縄産無釉陶器 壺(1~3)、甕(4)

(3) 本土産磁器【第12図、図版22】

本土産磁器は37点得られた。殆どが近代から現代に位置づけられるものである。1・2はいわゆるスンカンマカイである。絵付けには型紙が用いられ、同様の判図は市内遺跡では喜友名泉石疊（島袋2000）、伊佐前原第一遺跡（片桐・中山2001）、野嵩ウガンヌカタ遺跡（當間1996）、真志喜富盛原第二遺跡（山内1998）などで出土している。

第13表 本土産磁器観察表

図版 No.	器種	部位	口径 器高 底径	観察所見		出土地
				13.4	いわゆるスンカンマカイ。口縁部は外反する。型紙により繪付けされる。模様は点描で形作られ、三角形文と逆三角形文が主体となり、そのほか花文が描かれる。見込みには團繩が引かれ、中央には花文が描かれる。	
図版 22	碗	口～底	6.3	—	—	墓No1 表探
			4.4			
	碗	口～腹	13.4	—	いわゆるスンカンマカイ。口縁部は外反する。型紙により繪付けされる。模様は点描で形作られる。模様は松・竹・梅と、破片端には鶴の一部が確認できる。見込みには團繩が引かれ。	墓No1 表探
			—			
	碗	口～底	11.0	—	口縁部にかけてやや直線的に広がる。模様は鳥が羽ばたいている様子が描かれている。	墓No1 表探
			6.3			
			3.8			
	小碗	完形	8.2	—	口縁部直口。外面には花が描かれる。	墓No4 II-b層上面
			4.6			
			3.4			
	皿	口～底	13.0	—	内面には文字が描かれる。見込みには團繩が引かれ。	墓No1 表探
			2.8			
			7.2			
	皿	口～底	11.0	—	模様は内面全体に花文が描かれ、見込みには團繩が引かれ。	墓No1 表探
			2.3			
			6.2			
	皿	口～底	11.2	—	模様は内面全体に花文が描かれ、見込みには團繩が引かれ。	墓No1 表探
			2.2			
			6.2			



第12図 本土産磁器 碗(1~3)、小碗(4)、皿(5~7)



図版22 本土産磁器 碗(1~3)、小碗(4)、皿(5~7)

### 第3節　まとめ

当古墓群については、宜野湾市教育委員会により1989年に分布調査による成果が報告されているが(呉屋ほか 1989)、当時、発掘調査は行われなかった。今回、当古墓群の発掘調査を行い、これまでの分布調査の成果と合わせて普天間フィールー丘陵古墓群の新たな情報を追加することができた。

発掘調査は、キャンプ瑞慶覧地区内海軍病院移設に伴う開発予定範囲において、その直接的な影響を受ける1~4号墓について実施した。墓の型式は、1号墓が破風墓、2・3号墓が亀甲墓、4号墓が掘込墓である。これらの墓は丘陵の裾野に造られており、1~3号墓は丘陵南側にあり、4号墓は丘陵北西側の普天間川にかけて下降する谷の中腹にある。

1~3号墓の調査方法は、中心軸に沿って墓室内奥壁から墓域外にかけて幅50cmのトレチを設定し、最下層の琉球石灰岩岩盤まで掘削した。これらのトレチの壁面を確認したところ、表層であるI層以下の層は、大小様々な石灰岩礫により構成される礫層であり、この石灰岩礫層の下部には黒色土が少量あるが確認できた。また、最下層の岩盤は墓室内から墓門にかけて傾斜していく状況が確認できた。このことから丘陵南側に造られた1~3号墓は、墓室を造るために丘陵中腹を掘り込み、その前方に造られる墓庭については丘陵本来の傾斜が急なため、石灰岩礫を入れ込み平坦面を形成し墓庭を構築したと考えられる。また、1~3号墓の墓室の構造は、1号墓は丁寧に面を作り出した石灰岩をアーチ状に組み天井や壁を造る巻墓(マチバカ)であり、2・3号墓は石灰岩岩盤をドーム状に掘り込み石灰岩が露呈していた。1~3号墓の墓室の棚は奥に5段、左右に1段ずつ配し、1段目は墓口に向かってコの字形に広がる。このような棚の段数及び構成は、当古墓群における詳細分布調査で確認した他の破風墓と亀甲墓においても確認している(第III章参照)。また、1~3号墓の墓室は丘陵岩盤の傾斜を利用して造られており、棚は石灰岩岩盤の上に縁石をならべ石灰岩小礫を裏込めする方法が共通して用いられている。1~3号墓の反対側の丘陵北西側に位置する4号墓は、丘陵中腹の石灰岩岩盤を掘り込んだ塙込墓である。4号墓は墓の主軸に沿ってトレチを設定し掘削を行った結果、1~3号墓で確認できたような造成の痕跡は確認できなかつた。4号墓は野面積みで施された墓門と袖石が左右一部ずつ確認されたが、互いに対になる石積みは確認できなかつた。また、墓室は幅1.6m、奥行き1.7m、高さ0.8mと規模が小さく造られている。掘込墓で墓前方に石積みを施す特徴は、詳細分布調査で確認した15号墓(第III章参照)でも確認されている。しかし、両者は石積みを施す特徴があるが、他の墓室の造りや規模に共通性は見られない。当古墓群において、このような特徴をもつ掘込墓は現段階では類例が無く、今後の調査に向けて1つの類型として捉えたい。

今回の発掘調査で得られた遺物は総数296点で、得られた遺物の大半が表採によって得られたもので、遺物から直接的に各古墓の築造時期を推定し得る情報は得られなかつた。遺物は主に蔵骨器、沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器、本土産磁器が得られ、その他にガラス等の現代遺物が得られた。墓に関連する遺物として蔵骨器が得られたが、点数は15点で大半が破片であった。うち1点は、胴部に墨で蓮の花や葉が描かれており、この墨絵は器面を周回していたと思われる。4号墓では墓室内および墓口付近から人骨が出土したが、出土状況から埋葬された痕跡はなく、おそらく蔵骨器を持ち出される際にこぼれ落ちたものと考えられる。

今回の調査範囲は普天間フィールー丘陵古墓群において限定された一部であったが、1~3号墓にみられたような造成における共通性が確認できた。また、4号墓においても一部ではあるが野面積みの墓門と袖石が確認できた。これらの特徴は当丘陵における限定的な一部の性格として捉えられるかもしれないが、今後の当丘陵古墓群の調査における指標となりえる。現段階では当古墓群の起源や古墓の系統等について不明瞭な点が多いが、今後調査を重ね明確にしていきたい。

## 第V章 結語

本章では、今回実施した普天間フィールー丘陵古墓群の詳細分布調査及び発掘調査の成果をまとめ、今後の課題を提示する。

本古墓群は、キャンプ瑞慶覧地区内海軍病院移設に伴う開発行為の影響が及ぶ範囲にある。今回、工事の影響下にある古墓の詳細分布調査を実施したところ 19 基の古墓と、4 基の石積墓を確認した。これまでの調査報告では、当古墓群における特徴的な古墓として普天間旧集落の根屋とされる東江家・志礼家の神墓や石積墓等が紹介されており(吳屋ほか 1981、1989)、今回の調査により当古墓群の新たな情報を得ることができた。

### 詳細分布調査成果

調査は丘陵西側を範囲として実施し、亀甲墓 5 基、破風墓 2 基、掘込墓 9 基、型式不明 3 基確認し、さらにも当古墓群において石積墓とされる墓型式を、新たに確認したものも含め 4 基確認した。調査するにあたり、各古墓の位置座標、型式、外観として屋根・墓庭・墓口・墓室内の規模及び造り方を調査項目として設け、各箇所の計測及び観察を実施した。調査成果として、これらの調査データを項目ごとに表にまとめ、これを基に各墓型式の墓室内の平面面積と墓室内高さの平均値を求めた。墓室内的平面面積と墓室内高さは、破風墓と亀甲墓については型式内で差異は見られなかったが、掘込墓は型式内ではらつきがみられた。また、亀甲墓については、眉の形状及び墓の平面形状を数値化し、調査における亀甲墓の形態的な差を示した。その結果、今回の調査対象となった亀甲墓については、形態的な差は確認できなかった。この結果を基に宜野湾市内の亀甲墓との比較を行ったところ、宜野湾市内においては年代が下るにつれ亀甲墓における眉形態が扁平から屈曲へと推移する傾向を示唆することができた。今回、このような傾向がみられたが、宜野湾市内の亀甲墓を編年するには情報が未だ不十分である。今後も眉形態を含めた亀甲墓の構造に着目し、調査を進めていきたい。

掘込墓については、墓庭を持つことや、墓室内的規模及び棚の掘り込み形状に差異が見られた。また、4 号墓と 15 号墓には墓前方に石積みを施す特徴があり、15 号墓においてはおよそ 37 m<sup>2</sup> の定型的な方形の墓庭を持っている。両者は石積みを施す特徴があるが、その他の墓室内的規模や造り方に共通性は見られなかつた。今回の調査で、当古墓群における掘込墓の特徴を一部であるが捉えることができた。これらの特徴については、現在のところ類例の乏しさから性格はよく分かっていない。今後、調査を重ね、明らかになることを期待したい。

石積墓については、これまでの調査成果に今回得られた情報を加え性格の解明を試みた。今回を含めた調査成果から、これらの石積墓は墓としての性格も考えられるが、立石や周辺の階段状の石積み等から拌所として利用されていた可能性も考えられる。今後、調査するにあたり性格を明確にしていきたい。

### 緊急発掘調査成果

発掘調査は、直接的に工事の影響が及ぶ 1~4 号墓について実施した。丘陵南側に位置する 1~3 号墓は、丘陵中腹を掘り込んで墓室を造っており、これらの墓庭にあたる箇所は石灰岩岩盤よりも高い位置にあり、そのため墓庭の下部には約 10cm~30cm 大の石灰岩の礫を入れ込む造成を行った痕跡が各調査トレンチで確認できた。丘陵北西側傾斜部に造られる掘込墓である 4 号墓は、墓門と袖石を築くという特徴を持つ。中心軸に沿ってトレンチを設定し掘削を行った結果、墓使用時の層を確認することができた。今回の発掘調査により、当古墓群における亀甲墓、破風墓、掘込墓の 3 型式の築造方法を確認することができた。今後、当古墓

群の調査を行うにあたり、これらの成果を基に進めていきたい。

今回の調査範囲は普天間フィールド丘陵古墓群の一部であったため、古墓群全体の様相を把握するには至らなかった。当古墓群には、現在多くの古墓が丘陵に沿って残っており、今回確認できた特異な形態をもつ古墓が現在も残っていることが予想される。今回調査範囲内に含まれなかつた普天間旧集落の根屋とされる東江家・志礼家の神墓も、丘陵東側に位置する。今後、調査するにあたり当古墓群と普天間旧集落の関係性も含め、普天間地域の歴史環境の復元に努めていきたい。

## 参考文献【五十音順】

- ・伊藤圭 2008 「第III章 第1節 遺跡の内容」 『宇地泊西原丘陵古墓群—詳細分布調査・個人墓地造成に係る埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』 宜野湾市文化財調査報告書第42集 pp9~22 宜野湾市教育委員会
- ・片桐千葉紀・中山晋 2001 「第VI章 第13節」 『伊佐前原第一遺跡—宜野湾北中城線(伊佐~普天間)道路改築事業に伴う緊急発掘調査報告書(III)ー』 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第4集 p120・162 沖縄県教育委員会
- ・宜野湾市史編集委員会編 1985 『宜野湾市史』 第5巻資料編4・民俗 宜野湾市教育委員会
- ・呉屋義勝ほか編 1981 『キャンプ・ズケラン基地の文化財』(I) 宜野湾市文化財調査報告書第3集 宜野湾市教育委員会
- ・呉屋義勝ほか編 1989 『土に埋もれた宜野湾』 宜野湾市文化財調査報告書第10集 宜野湾市教育委員会
- ・島袋 洋 2000 「第IV章 喜友名泉石畳道 第3節出土遺物 D本土産磁器」 『喜友名泉石畳・喜友名山川原丘陵古墓群・伊佐前古墓群—宜野湾北中城線(伊佐~普天間)道路改築事業に伴う緊急発掘調査報告書(II)』 沖縄県文化財調査報告書第137集 pp26~36 沖縄県教育委員会
- ・竹内理三編 1986 『角川日本地名大辞典47 沖縄県』 角川書店
- ・當間麻子 1996 「第2章 第3節 3 陶磁器」 『野嵩ウガヌカタ遺跡 都市計画街路3-4-32号野嵩線建設工事に係わる緊急調査報告書』 宜野湾市文化財調査報告書第23集 pp50~61 宜野湾市教育委員会
- ・東恩納寛惇 1950 『南島風土記: 沖縄・奄美大島地名辞典』 沖縄郷土文化研究会
- ・比嘉政夫 1983 「ノロ制度」 『沖縄大百科事典』 下巻 p182 沖縄タイムス社
- ・平凡社地方資料センター編 2002 『日本歴史地名大系 第48巻沖縄県の地名』 平凡社
- ・山内淳一 1998 「第2章 3 遺物 [5] 本土産磁器」 『都市計画街路大謝名・真志喜線建設工事関係埋蔵文化財緊急発掘調査概要—真志喜富盛原第二遺跡・真志喜藏当原遺跡』 宜野湾市文化財調査報告書第27集 pp73~75 宜野湾市教育委員会
- ・外間守善・波照間永吉編 1997 『定本 琉球国由来記』 角川書店
- ・津波高志 1990 「III『琉球国由来記』の年中祭祀」 『沖縄社会民俗学ノート』 南島文化叢書11 pp195~235 第一書房

報告書抄録

ふ り が な	な	ふてんまふいーるーきゅうりょうこぼぐん			
書	名	普天間フィールー丘陵古墓群			
副 書	名	平成 22 年度 キャンプ瑞慶覧内米海軍病院移設予定地区発掘調査報告書			
卷	次	一			
シリ ー ズ	名	宜野湾市文化財調査報告書			
シリ ー ズ	番号	第 48 集			
編 著 者	名	森田直哉 玉城夕貴 横尾昌樹 宮城淳一			
編 集 機	関	沖縄県 宜野湾市教育委員会			
所 在 地	地	沖縄県宜野湾市野嵩 1-1-2			
發 行 年 月 日	日	平成 23 (2011) 年 3 月 31 日			
ふ り が な 所 収 遺 跡 名	ふ り が な 所 在 地	コード 北緯 東経 調査期間 調査面積 m <sup>2</sup> 調査原因			
	市町村 遺跡番号				
ふてんまふいーるーきゅうりょうこぼぐん 普天間フィールー丘陵古墓群	おきなわけん 沖縄県 ぎのいんし 宜野湾市 あがたてんま 字普天間 こあざくしづば 小字後原	4720 31 127° 46' 42" 26° 17' 25"	詳細分布調査 20090511 ～20090521 6175.4 m <sup>2</sup> 海軍病院移設に 伴う詳細分布調 査・緊急発掘調 査		
所 収 遺 跡 名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
普天間フィールー丘陵古墓群	その他の墓	近世・近代	掘込墓 破風墓 亀甲墓 石積墓	沖縄産施釉陶器 沖縄産無釉陶器 藏骨器 本土产磁器 ガラス	詳細分布調査に より 19 基の古 墓と 4 基の石積 墓を確認した。
要 約	本報告書は、周知の遺跡である普天間フィールー丘陵古墓群における詳細分布調査と海軍病院移設に伴う緊急発掘調査の成果をまとめたものである。詳細分布調査の結果、調査範囲内において亀甲墓、破風墓、掘込墓、型式不明が計 19 基、当古墓群において特徴的である石積墓が 4 基確認された。また、緊急発掘調査を実施した亀甲墓、破風墓、掘込墓では、造墓方法を確認することができ、今後、普天間古集落と墓域との関係を考える上で貴重な資料を得ることができた。				

宜野湾市文化財調査報告書 第48集

**普天間フィールー丘陵古墓群**

平成22年度 キャンプ瑞慶覧内米海軍病院移設予定地区発掘調査報告書

発行年 平成23(2011)年3月31日

編集 沖縄県宜野湾市教育委員会  
発行

住所 〒901-2203  
沖縄県宜野湾市野嵩1丁目1番2号  
TEL 098-893-4430

印刷 有限会社 大創  
TEL 098-892-8287